

泉南市遺跡群発掘調査報告書XXIV

泉南市文化財調査報告書 第四十七集

2007. 3

泉南市教育委員会

序 文

私たちの町、泉南市は古代からの行政区画では和泉国、その中でも南部に位置しています。地形的には北西を大阪湾、南東を和泉山脈に囲まれ、一年を通して温暖な気候条件を有する豊かな自然環境に恵まれ、古くから人々が生活し、この結果、市内には数多くの遺跡・文化財が残されており、残されています。

この先人の残した貴重な文化遺産を保護し、未来に伝えていくという重要な責務を果たすため、本市教育委員会ではさまざまな開発に対して緊急発掘調査を行って参りました。本書により更なる考古学研究の進展を期待すると同時に、市民の皆様には更なる文化財の普及啓発にも努めてまいりたいと思います。特に今年には埋蔵文化財センター開館10年、海会寺跡の国史跡指定から20年にあたる年でもあります。この記念すべき年にあたり、より一層充実した文化財保護行政を推進して参りたいと思います。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元土地所有者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々には、深く感謝の意を述べさせていただきますと同時に、今後とも本市の文化財行政により一層のご理解、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

泉南市教育委員会
教育長 梶本 邦光

例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成18年度国庫補助事業として計画し、生涯学習課が実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会生涯学習課、石橋広和・城野博文・河田泰之を担当者とし、平成18年4月1日に着手し、平成19年3月31日に終了した。なお、本書に掲載している内容は、平成18年1月1日から平成18年12月31日までのものである。
3. 現地調査および整理の実施にあたっては蒲生徹幸、蔵田弘幸、藤野 渉、真鍋紀美子諸君らの協力を得た。
4. 本書の執筆は第1章を石橋が、第2章第8節および第3章第2節を河田が行い、その他については城野が行った。編集は城野が行った。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は城野が行った。
6. 調査における出土遺物および図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望むものである。

凡 例

1. 各調査区には個別の番号を付した。番号の構成は、「遺跡略称-調査年度-通し番号」である。遺跡略称は、男里遺跡-ON、幡代遺跡-HT、幡代南遺跡-HTS、長山遺跡-NG、氏の松遺跡-UJ、岡田遺跡-OKD、岡田東遺跡-OKDE、兔田遺跡-US、中小路西遺跡-NKW、川原遺跡-KWHである。調査年度は西暦の上位2桁を省略して表記している。
2. 図中の方位は、PL.1・2では真北を、各調査区位置図・地形図では国土座標VI系にもとづく座標北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。
3. 図版中に示したレベル高は、T.P.+(m)の数値を使用しているが、T.P.+は省略している。
4. 本書で扱う地形分類図は、豊田兼典氏が作成した。(PL.2)
5. 遺構名称は、遺構の種類を表すアルファベットと任意の数列の組合せで表記している。本書にて扱う遺構の種類はSD-溝、SX-不明遺構である。
6. 図示した遺物の断面は、弥生土器、石器-白抜き、須恵器-黒塗りのように区分している。
7. 遺物実測図と写真図版において遺物番号は統一している。

目 次

第1章 調査の経過	1
第2章 男里遺跡の調査	
第1節 既往の調査	4
第2節 06-1 区の調査	4
第3節 06-2 区の調査	7
第4節 06-3 区の調査	7
第5節 06-4 区の調査	8
第6節 06-5 区の調査	9
第7節 06-6 区の調査	9
第8節 06-7 区の調査	10
第9節 05-6 区の調査	11
第10節 05-7 区の調査	11
第11節 05-8 区の調査	13
第3章 幡代遺跡の調査	
第1節 既往の調査	21
第2節 06-1 区の調査	21
第4章 幡代南遺跡の調査	
第1節 既往の調査	22
第2節 06-1 区の調査	22
第5章 長山遺跡の調査	
第1節 既往の調査	23
第2節 06-1 区の調査	23
第6章 氏の松遺跡の調査	
第1節 既往の調査	24
第2節 06-1 区の調査	25
第7章 岡田遺跡の調査	
第1節 既往の調査	26
第2節 05-3 区の調査	26
第8章 岡田東遺跡の調査	
第1節 既往の調査	27
第2節 05-1 区の調査	27
第9章 兎田遺跡の調査	
第1節 既往の調査	28
第2節 06-1 区の調査	28
第10章 まとめ	30
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 男里遺跡・幡代遺跡・幡代南遺跡・長山遺跡調査区位置図	5
第2図 男里遺跡 06-1 区地形図	6

第3図	男里遺跡 06-1区・06-7区出土遺物	6
第4図	男里遺跡 06-2区・05-8区地形図	7
第5図	男里遺跡 06-3区地形図	8
第6図	男里遺跡 06-4・5・6区地形図	9
第7図	男里遺跡 06-7区・05-6区地形図	10
第8図	男里遺跡 05-7区地形図	12
第9図	男里遺跡 05-8区出土遺物①	14
第10図	男里遺跡 05-8区出土遺物②	15
第11図	男里遺跡 05-8区出土遺物③	16
第12図	男里遺跡 05-8区出土遺物④	17
第13図	幡代遺跡 06-1区地形図	21
第14図	幡代南遺跡 06-1区地形図	22
第15図	長山遺跡 06-1区地形図	23
第16図	氏の松遺跡・中小路西遺跡・岡田遺跡・岡田東遺跡・川原遺跡調査区位置図	24
第17図	氏の松遺跡 06-1区地形図	25
第18図	岡田遺跡 05-3区地形図	26
第19図	岡田東遺跡 05-1区地形図	27
第20図	兎田遺跡調査区位置図	28
第21図	兎田遺跡 06-1区地形図	29

表目次

第1表	平成18年発掘および試掘調査届出一覧表	1
第2表	発掘調査一覧表	2
第3表	試掘調査一覧表	3
第4表	立会調査一覧表	3
第5表	文化財一覧表	32

図版目次

PL. 1	泉南地域の文化財
PL. 2	泉南地域の地形分類
PL. 3	男里遺跡①調査区
PL. 4	男里遺跡②、幡代遺跡、幡代南遺跡、長山遺跡、氏の松遺跡、岡田遺跡、岡田東遺跡、 兎田遺跡調査区
PL. 5	男里遺跡 06-1・2・3区
PL. 6	男里遺跡 06-4・5・6区
PL. 7	男里遺跡 06-7、05-6・7区
PL. 8	男里遺跡 05-8区、幡代遺跡 06-1区、
PL. 9	幡代南遺跡 06-1区、長山遺跡 06-1区、氏の松遺跡 06-1区
PL. 10	岡田遺跡 05-3区、岡田東遺跡 05-1区、兎田遺跡 06-1区
PL. 11	男里遺跡出土遺物①
PL. 12	男里遺跡出土遺物②

泉南市遺跡群発掘調査報告書X XIV

第1章 調査の経過

第1表のとおり、平成18年における届出の状況は、昨年から引き続き高い数値を示している。泉南市の主要産業のひとつであった繊維産業が衰退し、多くの工場跡地が宅地として開発され、またバブル崩壊以降手つかずになっていた土地がまとまって開発されるに至り、これらに伴う試掘、確認調査が増加し、その結果本調査に至る例も多い。今後ともこうした傾向は続いてゆくものと考えられる。

このような状況のもと第2・3表のとおり調査が行われ、このうち本書で報告するのは、昨年度未報告分の5件を含む8遺跡、17調査区である。それぞれの遺跡について調査の経過を述べたい。

男里遺跡は、今年度も最も多く調査が行われたが、遺跡南東部の府道金熊寺男里線や遺

跡北西縁辺部の市道男里北線沿いにおいて規模の大きな開発が増加している。今年度は9件の調査が行われ、このうち7件の調査と昨年度未報告の3件の調査を報告している。

幡代遺跡は、毎年着実に調査が行われている遺跡である。今年度は現幡代集落内で1件の調査が行われ報告している。

幡代南遺跡は、分布調査以降、そのほとんどが水田であるため府道建設に伴う調査以外はまったく行われたことが無かったが今年度は初めて遺跡のほぼ中心部で調査が行われ報告している。

長山遺跡は、南北に細長い形状を呈した遺跡である。立地から大規模な開発は少ないものの個人住宅に伴う調査はある程度行われている。今年度は1件の調査が行われ報告している。

氏の松遺跡は、市道建設の伴う調査以降ほとんど調査は行われていない。今年度は遺跡北部の段丘先端部で1件の調査が行われ報告している。

岡田遺跡は、男里遺跡に次ぐ規模を持ち、調査件数も同様の傾向にある遺跡であるがこの数年は小規模な調査が多くなっている。昨年度未報告の1件の調査を報告している。

岡田東遺跡は、試掘調査に伴い発見された遺跡で、範囲が限定されているためほとんど調査が行われていなかった。昨年度未報告の1件の調査を報告している。

兔田遺跡は、現兔田集落のほとんどを含み、小規模ながら住宅の建て替え等に伴う調査がある程度行われている。今年度も集落内部で1件の調査が行われ報告している。

第1表 平成18年発掘および試掘調査届出一覧表

平成18年12月31日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面積 (㎡)	件 数	面積 (㎡)	件 数	面積 (㎡)
18年1月	6	1,110.53	4	7,639.03	10	8,749.56
2月	3	2,426.69	3	7,418.77	6	9,845.46
3月	5	2,439.64	1	1,147.73	6	3,587.37
4月	4	471.38	3	2,874.67	7	3,346.05
5月	8	6,600.58	3	2,790.46	11	9,391.04
6月	6	10,500.55	1	1,153.00	7	11,653.55
7月	12	10,712.76	4	4,751.26	16	15,464.02
8月	5	614.23	2	1,018.92	7	1,633.15
9月	6	6,095.46	2	2,828.51	8	8,923.97
10月	2	478.51	1	373.11	3	851.62
11月	7	1,048.08	3	2,677.17	10	3,725.25
12月	4	554.08	2	3,067.96	6	3,622.04
合 計	68	43,052.49	29	37,740.59	97	80,793.08

第2表 発掘調査一覧表

平成18年12月31日現在

No.	遺跡名	地区名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	06-1区	幡代	132.18	個人住宅	18年8月	本書掲載 ⑬-28
2	男里遺跡	06-2区	男里	150.58	個人住宅	18年11月	同上 ⑬-46
3	男里遺跡	06-3区	男里	170.80	個人住宅	18年12月	同上 ⑬-45
4	男里遺跡	06-4区	男里	612.36	共同住宅	18年10月	同上(確認調査) ⑬-29
5	男里遺跡	06-5区	男里	135.58	個人住宅	18年11月	同上 ⑬-43
6	男里遺跡	06-6区	男里	222.49	個人住宅	18年11月	同上 ⑬-44
7	男里遺跡	06-7区	男里	2,267.27	宅地造成	18年4月	同上(確認調査) ⑰-40
8	男里遺跡	06-8区	馬場	5,547.80	宅地造成	18年7~9月	別書掲載 ⑬-8
9	男里遺跡	06-9区	馬場	7,458.40	宗教施設	(確認調査) 18年7~8月 (本調査) 18年11月~ 現在継続中	別書掲載 (確認調査の結果、本調査にいたる) ⑬-16
10	男里遺跡	05-6区	男里	192.76	個人住宅	18年1月	本書掲載 ⑰-31
11	男里遺跡	05-7区	男里	155.13	個人住宅	18年2月	同上 ⑰-38
12	男里遺跡	05-8区	男里	4,449.70	宅地造成	18年2~3月	同上(確認調査) ⑰-28
13	幡代遺跡	06-1区	幡代	251.73	個人住宅	18年7月	同上 ⑬-5
14	幡代南遺跡	06-1区	信達岡中	171.93	個人住宅	18年9月	同上 ⑬-36
15	長山遺跡	06-1区	馬場	229.98	個人住宅	18年10月	同上 ⑬-39
16	中小路西遺跡	06-1区	中小路	1,554.14	共同住宅	18年6月	トレンチ2ヵ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。(確認調査・第16図) ⑰-44
17	氏の松遺跡	06-1区	岡田	417.11	個人住宅	18年4月	本書掲載 ⑰-41
18	岡田遺跡	05-3区	岡田	170.30	個人住宅	18年1月	同上 ⑰-35
19	岡田東遺跡	06-1区	北野	8,781.35	宅地造成	18年10月	トレンチ6ヵ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。(確認調査・第16図) ⑬-25
20	岡田東遺跡	05-1区	北野	779.13	個人住宅	18年2月	本書掲載 ⑰-24
21	川原遺跡	06-1区	岡田	2,512.39	宅地造成	18年6月	トレンチ1ヵ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。(確認調査・第16図) ⑬-14
22	兎田遺跡	06-1区	兎田	1,561.98	庫裏	18年5月	本書掲載 ⑬-46

第3表 試掘調査一覧表

平成 18 年 12 月 31 日現在

No.	遺跡名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	範囲外	新家	2,067.10	宅地造成	18年1月10日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	樽井	1,138.79	宅地造成	18年1月12日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	馬場 樽井	2,978.32	葬儀所	18年1月13日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	樽井	1,082.82	宅地造成	18年2月14日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	岡田	1,292.87	宅地造成	18年2月21日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	樽井	1,147.73	宅地造成	18年4月24日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	信達市場	4,392.67	宅地造成	18年5月15日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	樽井	492.26	宅地造成	18年6月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	信達市場	1,869.40	分譲住宅	18年6月28日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	信達牧野	1,733.21	共同住宅	18年7月28日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	信達牧野	1,916.90	共同住宅	18年8月29日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	新家	1,153.00	店舗	18年9月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	樽井	1,653.92	宅地造成	18年9月29日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	信達市場	2,495.06	宅地造成	18年12月7日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成 18 年 12 月 31 日現在

No.	遺跡名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	六尾南遺跡	信達六尾	373.20	個人住宅	18年3月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	海会寺跡	信達大苗代	9.50	電信電話	18年3月3日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	岡中遺跡	信達岡中	228.57	個人住宅	18年4月3日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	男里遺跡	馬場	286.08	ガス	18年6月20日 ～7月31日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	座頭池遺跡	岡田	148.00	電話通信	18年7月11日 ～14日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	戎畑遺跡	樽井	214.07	個人住宅	18年7月11日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	海会寺跡	信達大苗代	107.70	個人住宅	18年8月3日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	北野遺跡	信達大苗代	164.26	個人住宅	18年8月29日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	男里遺跡	男里	166.16	個人住宅	18年9月5日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	海会寺跡	信達大苗代	101.45	個人住宅	18年9月15日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	男里遺跡	男里	1,544.56	店舗	18年10月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	男里遺跡	馬場	87.00	ガス	18年10月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	男里遺跡	男里	144.96	個人住宅	18年12月15日	遺構・遺物は確認されなかった。

第2章 男里遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

男里遺跡は市域平野部の北西端に位置し、男里川右岸の沖積地上に立地する。沖積地の構造は古金熊寺川によって形成された扇状地形の大半を氾濫原が占めており、氾濫原のほぼ中央には旧河道が存在する。氾濫原の西側、現在の男里川河岸には自然堤防が発達し、氾濫原の東側には沖積段丘が発達している。現在、自然堤防上には男里集落があり、段丘上には馬場集落が立地する。氾濫原は主に耕作地として利用されてきたが、近年氾濫原と段丘の境界を縫うように大規模な府道が建設されたことで新たな開発が増加し、周囲の景観も大きく様変わりしつつある。

これまでに旧石器時代より近現代に至る多くの資料が獲得されており、それぞれの大まかな分布も知られつつある。縄文時代後期以前の資料^①はいずれも散発的であり、現状ではまとまりを見出すことはできないが、後期から晩期には遺跡の中央から北西部、氾濫原に属する地点に活動の中心が求められる。遺跡中央に位置する双子上池では長原式と弥生時代前期の土器が同一の包含層より出土している^②。弥生時代前期には双子池の南方に遺跡が展開するものと思われるが、資料が限定的であり明確さを欠く。弥生時代中期には遺跡の南東部にあたる沖積段丘上において、30数棟の竪穴住居をはじめ、掘立柱建物や方形周溝墓などからなる集落が展開する^③。集落の西側には自然流路を利用した大溝が存在し、数点の絵画土器を含む多量の遺物が出土している。

古墳時代には双子池周辺に前期の資料^④がみられ、遺跡の北西縁部にあたる氾濫原上において後期の竪穴住居^⑤が確認されている。

飛鳥、奈良時代には遺跡北西縁部での活動が縮小され、双子池周辺へと遺跡の中心が移動する^⑥。平安時代には遺跡の北西部^⑦に加えて、北東部の沖積段丘上においても掘立柱建物^⑧などが確認される。北側に位置する戎畑遺跡^⑨において当該期の大規模な灌漑用水路が確認されており、生産力の向上に裏打ちされた集落範囲の拡大と捉えることができる。中世には活動範囲が飛躍的に拡大する。なかでも14世紀後半以降、集落地の移動が顕著に認められ、こうした変遷を辿ることで現在の男里馬場両集落にみられる「集村」の実態を解明することができる。

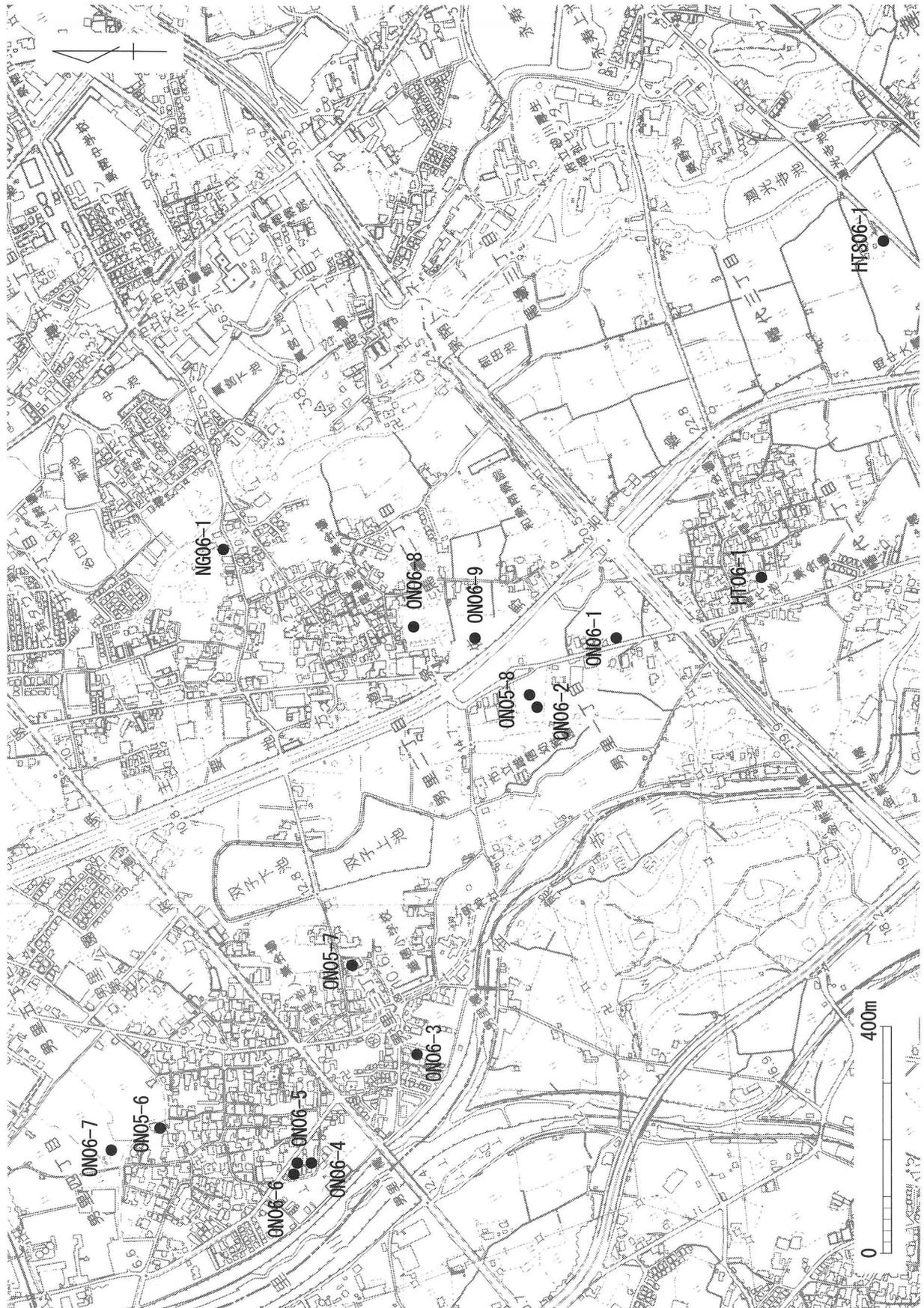
第2節 06-1区の調査

1. 位置 (第1、2図)

調査区は遺跡の南端に位置し、国道26号「幡代」交差点を約90m北上した地点である。地形的には沖積段丘に属する。周辺では南西約90mに位置する91-13区^⑩より弥生時代から古墳時代の遺物を伴う埋積谷が検出されている。また南西約150mには05-8区が位置する。現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

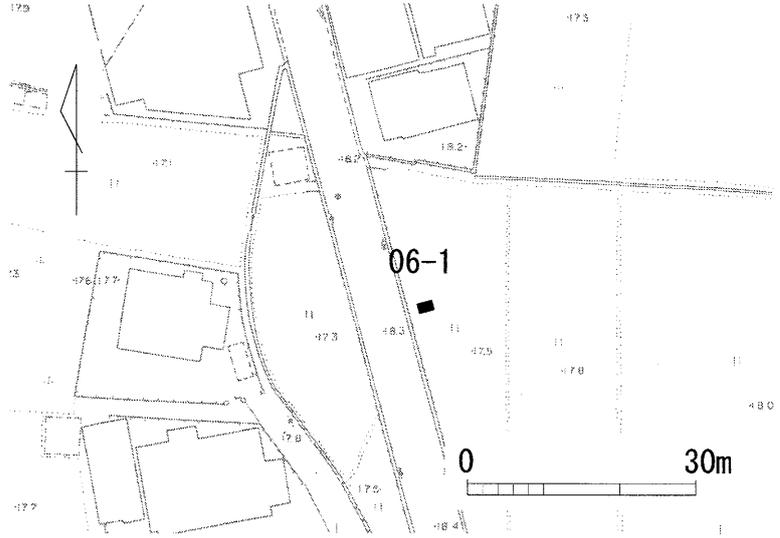
2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、5)

盛土以下、床土である黄橙色混じり淡灰褐色土(2層、約20cm)、暗褐色シルト(3層、約



第1図 男里遺跡・幡代遺跡・幡代南遺跡・長山遺跡調査区位置図

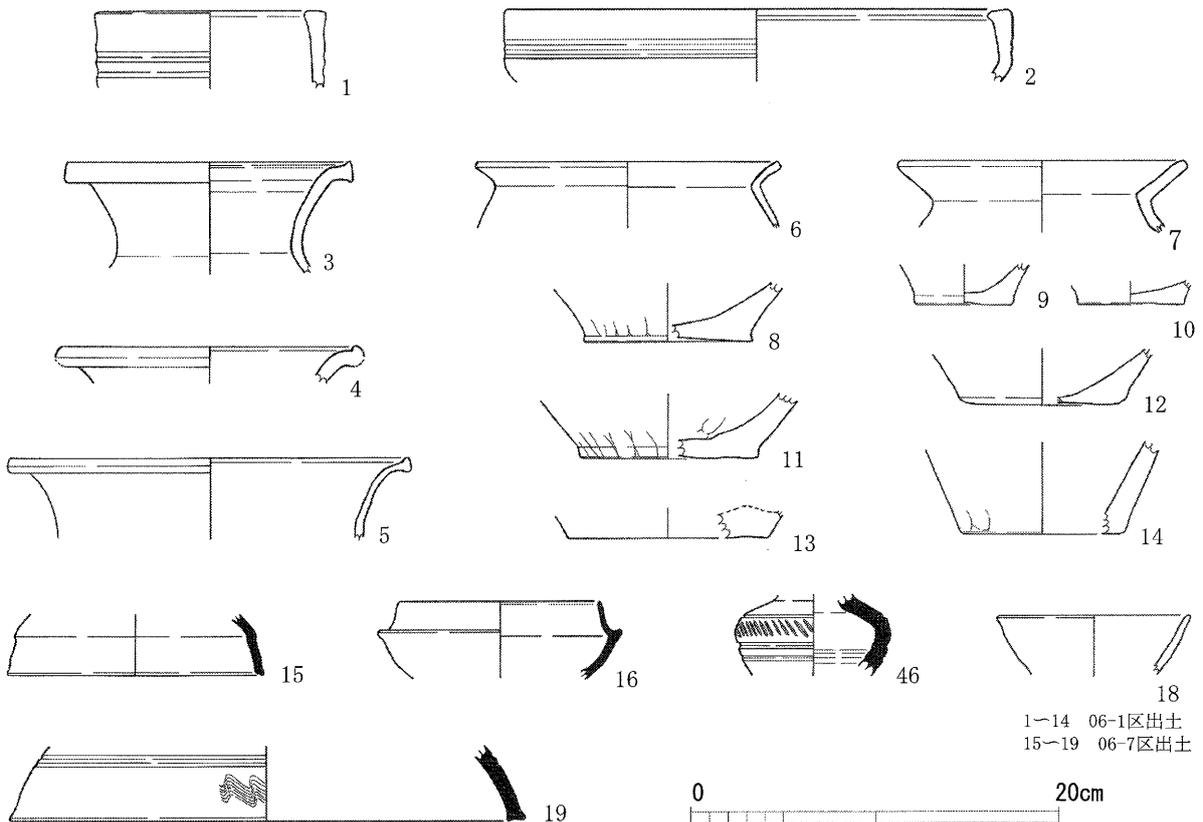
40cm)、淡褐色砂質シルト(4層、約40cm)を経て淡褐色砂礫へと至る。いずれも概ね水平堆積を呈するが、5層はいくぶん西に傾斜している。また3層は非常に固く締まり、乾痕が著しく認められることから、一時期地表に露出していたものであろう。少量の弥生土器を含む。4層は若干の円礫を含んでおり、3層ほど固く締まらない。また3層と比べて遺物を多く含み、バスケット1杯分の弥生土器が出土している。周辺では4層に対応する遺物包含層は確認されていないことから、遺構埋土と考えるのが妥当であろうか。



第2図 男里遺跡06-1区地形図

3. 遺物 (PL. 11、第3図)

出土遺物のうち、図示することができたのは、すべて4層から出土したものである。完形になるものは1点もみられず、いずれも小片でしかない。1は直口壺であり、口縁下端に2条の凹線文



第3図 男里遺跡06-1区・06-7区出土遺物

を巡らす。2は段状口縁壺であり、口縁部がわずかに内湾する。端部を肥厚させ、上端は平坦面をなす。口縁下端に2条の凹線文を巡らす。3は広口壺である。口縁部の大きく外反するもので、端部は肥厚し、上方につまみ上げられている。4は広口壺である。口縁端部のみではあるが、大きく外反するものであり、端部は肥厚し上方に折りまげられている。5は広口壺である。大きく外反する口縁部を持ち、端部は肥厚し上方につまみ上げられている。薄い器壁を持つ。6は甕である。口縁部はくの字形に強く外反し、端部は平坦面をなす。7は甕である。胎土に結晶片岩を含み、紀伊産と考えられる。8、11～14は壺の底部である。平底を呈し、内外面に指頭圧痕を残すものがある。9、10は甕の底部である。いずれも平底を呈する。

第3節 06-2 区の調査

1. 位置 (第1、4図)

調査区は遺跡の南西端にあって、05-8区の実施された開発地に含まれ、先の第2トレンチ北約5mに近接する。現状は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

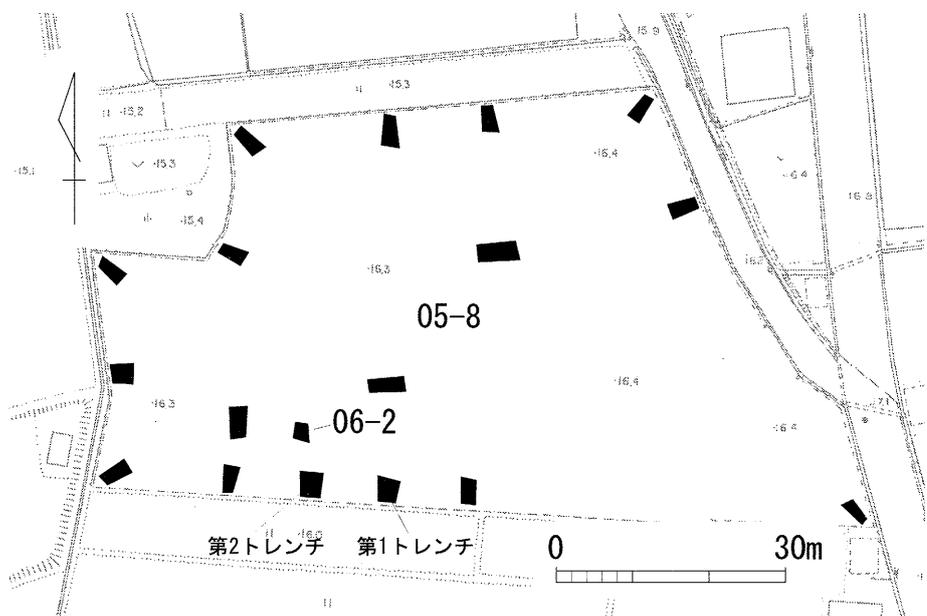
2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、5)

盛土を除去すると、暗灰色土(2層、約15cm)、暗橙色混じり灰白色砂質土(3層、約15cm)が概ね水平堆積をみせ、さらに4層である灰褐色礫混土へと続く。4層は約50cmほど掘削しても状況に変化はみられなかった。4層上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。また遺物も出土しなかった。

第4節 06-3 区の調査

1. 位置 (第1、5図)

調査区は遺跡の北西部に位置し、現男里集落の南西端部にあたる。調査区の北約30mを東西道路が走るが、この道路付近にはかつて霞提が存在しており、調査区を含む一帯は霞提と河道堤体とにはさまれた低地であった。地形的には金熊



第4図 男里遺跡 06-2区・05-8区地形図

寺川と山中川合流地点より北に広がる自然堤防上に立地する。周辺は宅地開発に伴う調査^④が多く行われており、いずれも砂礫による地山が確認されている。現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、5)

盛土以下、淡暗灰褐色砂質土 (2層、約20cm)、暗橙色混じり淡灰褐色砂質土 (3層、約10cm)、

淡黄灰色砂質シルト (4層、約40cm) の各層が概ね水平堆積をみせる。このうち2層は近現代の耕作土、3層は床土、4層は耕地開発に伴う整地層と捉えることのできるものである。

4層以下はプライマリーな堆積状況を示し、基本的には淡褐色砂礫 (約10～40cm) と黄灰褐色砂質土 (約10～20cm) が互層をなし、部分的に淡褐色砂 (約10cm) を介在する。それぞれの層厚が極めて薄く、明確な地山として捉えることはできないが、いずれも河川性の堆積であり、かつ互層をなすことから、震提の作用によって度々誘水が繰り返されたことに起因するものと判断される。4層ならびに淡褐色砂礫および黄灰褐色砂質土上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。また遺物も出土しなかった。

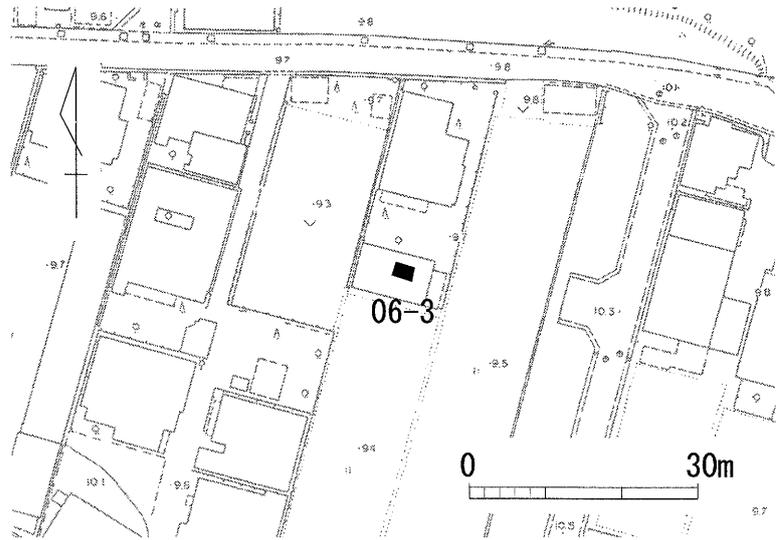
第5節 06-4 区の調査

1. 位置 (第1、6図)

調査区は遺跡の北西縁部に位置し、府道堺阪南線「男里川」交差点から北西約130mの地点である。地形的には氾濫原および谷底低地に属する。周辺では比較的多くの調査^④が実施されており、いずれも不安定な砂礫層を整地したうえで、耕地化したことが確かめられている。現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、6)

盛土以下、淡暗灰褐色シルト (2層、約20cm)、淡灰褐色混じり暗橙色土 (3層、約10cm)、淡灰褐色砂質土 (4層、約15cm)、にぶい黄褐色混じり淡灰褐色砂質土 (5層、約15cm)、淡明褐色砂質土 (6層、約10cm) と続き、地山である淡灰褐色砂 (7層) へと至る。これらはいずれも概ね水平堆積をみせるが、5層上面において若干の凹凸がみられ、また2層上面にも畝と考えられる起伏がある。2層は耕作土、3層は床土、4層は床土もしくは旧耕作土である。5層についてはにぶい黄褐色粘土のブロックを多く含むもので、整地層と捉えることができる。5層より



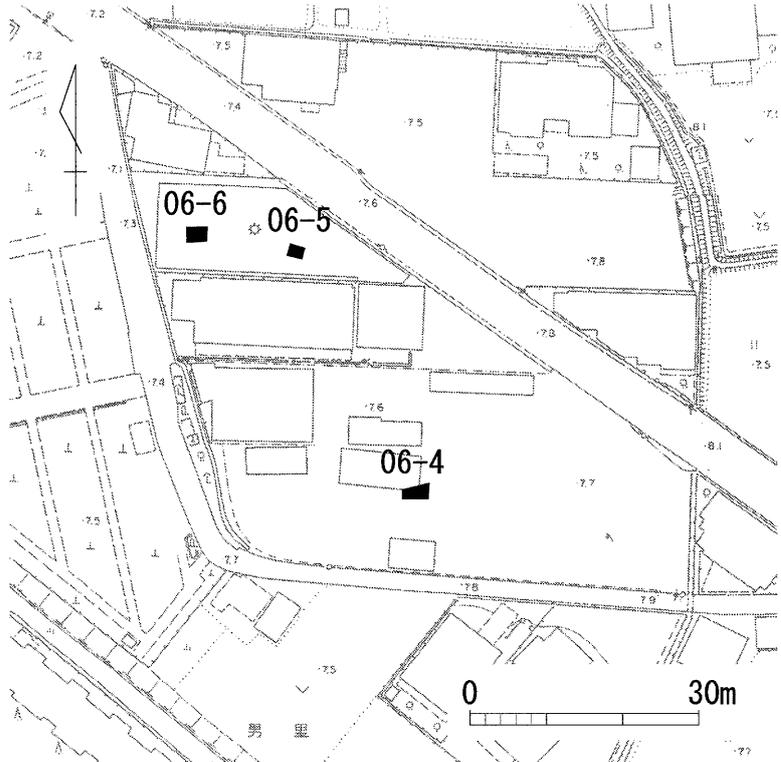
第5図 男里遺跡06-3区地形図

中世と思われる平瓦片が1点出土している。6層についても地山直上の整地層と捉えることが可能であり、7層以下には氾濫原を構成する砂礫層が続くものと考えられる。5層ならびに7層上面にて精査を行ったが遺構は確認されなかった。

第6節 06-5 区の調査

1. 位置 (第1、6図)

調査区は遺跡の北西縁部に位置し、06-4区の北西約35mに位置する。現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。



第6図 男里遺跡 06-4・5・6区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、6)

盛土以下、灰褐色砂質シルト (2層、約10～30cm)、暗橙色混じり淡灰褐色砂質土 (3層、約10cm)、淡褐灰色砂質土 (4層、約15～30cm)、褐色混じり淡灰褐色土 (5層、約15cm) がみられ、地山である淡灰褐色礫混じり土へと至る。2、4層が耕作土、3層が床土であり、南北方向には畝と考えられる起伏がみられる。5層は起伏の激しい地山を被覆した整地層と考えられる。地山である淡灰褐色礫混じり土は確認面-50cm程で礫混じりの砂へと変化しており、氾濫原を構成するものと考えて間違いないだろう。地山直上より中世と思われる土師器がわずかに出土している。かなり摩滅しているため詳細は不明であるが、整地の時期を知る手がかりとなる。また出土層位は不明であるが中世瓦が1点出土している。地山面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。

第7節 06-6 区の調査

1. 位置 (第1、6図)

調査区は遺跡の北西縁部に位置し、06-5区の西約15mの地点に隣接する。現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、6)

盛土および攪乱以下、淡灰褐色混じり淡褐灰色砂質土 (2層、約25cm) を挟み、地山である淡褐色礫混土 (3層、約30cm) および褐色砂礫へと至る。攪乱により東に隣接する06-5区にみら

れた耕作土や床土は完全に失われている。地山直上の状況は06-5区と概ね共通しており、不安定な砂礫層を整地したものと考えることができる。地山上面の比高はわずかに本調査区の方が高く、西から東に向かって緩やかに傾斜する旧知形であったことがわかる。地山上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。また遺物も出土しなかった。

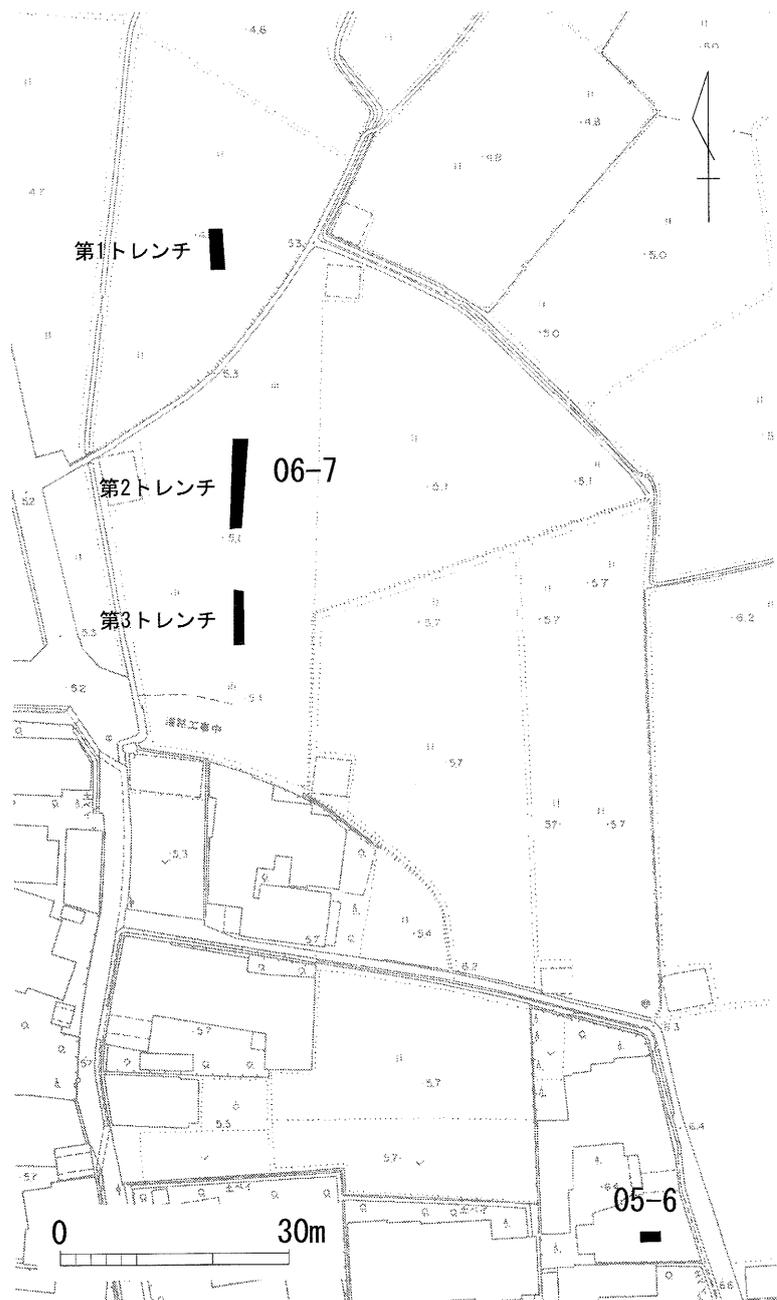
第8節 06-7区の調査

1. 位置 (第1、7図)

調査区は遺跡の北西、地形分類では自然堤防もしくは氾濫原および谷底低地にあたる。これまでの調査では、隣接する男里北線改良事業にともなう発掘調査が行われている。このうち本調査区に隣接するA区では、2面の遺構面が確認されており、上面では時期不明の耕作に伴う溝、下面では14世紀代の遺物が出土した石組井戸が確認されている¹³⁾。また、本調査区の南側にあたる現在の男里集落北西部で数件の調査が行われているが、いずれの調査区でも明確な遺構は確認されていない¹⁴⁾。現況は耕作地で、トレンチは3カ所設定した。以下、中央に位置し、最も特徴的であった第2トレンチの状況について述べる。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、7)

黒褐色シルト (1層・約10cm) を除去すると、灰褐色シルト (2層、約30cm)、褐灰色シルト (4層・約20cm)、灰褐色シルト (5層・10cm)、黒褐色シルトに灰褐色シルトが筋条に混入 (6層・約30cm)、黄褐色シルト (7層) に



第7図 男里遺跡 06-7区・05-6区地形図

いたる。1～4層は耕地化された後のもので、5層以下はそれ以前の自然堆積と考えられる。3層で土錘、6層で須恵器や土師器などが出土している。遺構は、4層上面で耕作に伴う溝を確認したが埋土（3層）の状況から近世以降のものと考えられる。なお、6層から遺物が出土しており、同層を埋土とする溝もしくは土坑（SX01）とも考えられるが、人為的な遺構ではなく浅い窪地のような自然地形である可能性が高い。すなわち出土した遺物が細片ばかりで接合するものがないことと、6層の主体となる黒褐色シルトにみられる乾痕と考えられる縦方向の割れ目に沿って上層の土層が貫入しているような状況が確認されたためである。

3. 遺物（PL. 11、第3図）

15～18はSX01の埋土から、19は擁壁工事の立会の際に出土した。18は土師器で、それ以外は須恵器である。15・16は杯、17は罎、19は器台、18は甕の口縁部であろうか。これらの遺物からSX01が埋没したのは、少なくとも6世紀代以降といえよう。

第9節 05－6区の調査

1. 位置（第1、7図）

調査区は遺跡の北西部にあり、06－7区の南東約100mに位置する。現男里集落の北端部にあって、集落の北縁部に沿う形で敷設された市道男里北線に東面し、市道建設に伴う発掘調査のD区に接する^⑤。D区では4面の遺構面が確認されており、中でも3面（13世紀中頃～後半）、4面（6世紀代および10世紀）において堅穴住居や掘立柱建物、蛸壺焼成土坑など、多くの遺構が確認されている。現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 3、7）

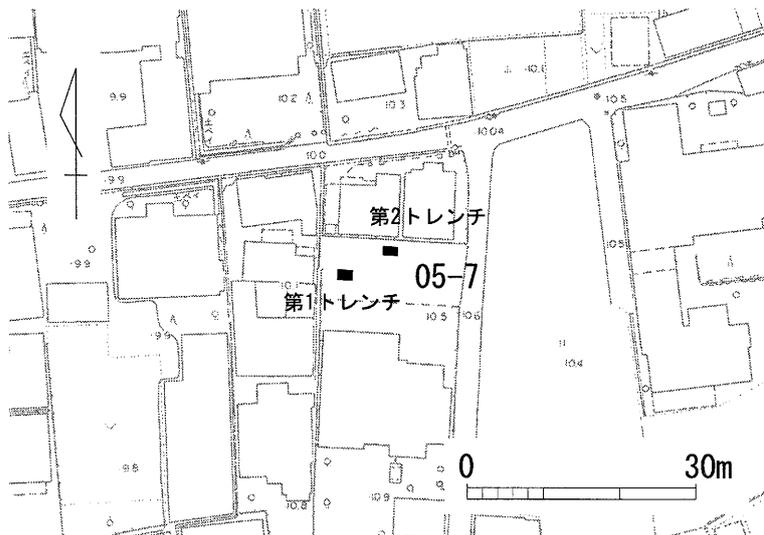
盛土以下、淡暗灰褐色土（2層、約10～20cm）、暗灰白色砂質土（3層、約5cm）、淡黄白色砂質土（4層、約5～15cm）、灰白色砂質土（5層、約5～15cm）の各層がみられ、4層が5層を切り込むほかは概ね水平堆積を呈する。いずれも耕作土もしくは床土と捉えられる。5層以下にはトレンチ南東隅において暗灰褐色礫混土（7層、約40cm）が露呈するが、上面にはかなりの起伏が存在し、大きくは東から西へと傾斜している。その起伏に合わせて淡灰褐色混じり暗黄褐色シルト（6層、約10～20cm）が堆積しており、一部にはブロック状に混入する箇所もある。7層直下には8層である暗灰褐色砂礫が認められる。7、8層については河川性の堆積によるものと判断され、縄文土器と思しき遺物がわずかに含まれている。6層および7層上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。

第10節 05－7区の調査

1. 位置（第1、8図）

調査区は遺跡の中央部、西寄りに位置し、現男里集落の南東端部にあたる。地形的には男里川右岸の自然堤防上に立地する。周辺の調査では、北西約10mの02-3区^⑥より古代の須恵器が、南

西約 15 m の 99-10 区[㊦]より須恵器、土師器を含む遺物包含層が、南約 30 m に位置する 89-10 区[㊦]より時期的には不明ながらもピットや溝といった遺構が確認されている。現況は更地であり、トレンチは 2 ヶ所設定し、西側を第 1 トレンチ、東側のものを第 2 トレンチとする。



第 8 図 男里遺跡 05-7 区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、7)

第 1 トレンチは攪乱によって大きく削平を受けており、元来の層序を確認することができたのはトレンチ西端部のみであった。盛土以下、暗灰褐色シルト (2 層、約 20 - 30cm)、淡灰褐色砂質シルト (3 層、約 10cm)、褐色混じり淡灰褐色砂質シルト (4 層、約 15cm)、暗黄灰褐色シルト (5 層、約 15cm)、黄灰色礫混土 (6 層、約 10cm) の各層がほぼ水平に堆積し、地山である暗黄褐色粘土に至る。6 層は径 5 - 25cm 大の円礫を多量に含むことから、河川性堆積を思わせるが、後述する遺構埋土を切っており、古墳時代以降に形成された落ち込みなどである可能性もある。地山上面において遺構が確認された。

第 2 トレンチでは攪乱を除去すると、トレンチ中央から東端には淡黄灰褐色砂質シルト (2 層、約 20 - 40cm) がみられ、灰白色砂質シルト (3 層、約 60cm) へと続く。トレンチ西端部には 1 層以下に淡灰褐色砂質シルト (4 層、約 15cm)、橙色混じり灰褐色土 (5 層、約 30cm)、灰白色土 (6 層) が水平堆積をみせるが、3 層によって大きく削られている。4 - 6 層はいずれも旧耕作土または床土であることから、元来は耕作面が全体に広がっていたものと考えられる。6 層上面において 3 層を埋土とする遺構プランが確認された。その形状から灌漑用井戸やピットと考えられるものであるが、開発に伴う掘削が 6 層以下に及ばないことを確認したため、遺構を含め以下の掘削は行っていない。

3. 遺構 (PL. 4、7)

第 1 トレンチにおいてピットと溝 (SD01) が確認された。ピットはトレンチ東半部で確認され、平面的には南東から北西に軸を持つ長楕円形に北方向への張出しが伴う。断面形状は浅い皿状を呈するが、南東側のみ狭い平坦面を有する。長径、短径ともに約 60cm、確認面よりの深さ約 20cm を測る。埋土は 1 層であり、淡暗褐色礫混土である。遺物は出土しなかった。

SD01 はトレンチ西端部において確認された。わずかに東辺を確認したに過ぎず、全容は不明であるが、南北方向に直線状に伸びるものと考えられる。確認面よりの深さは 5 - 10cm を測り、底面のレベルは北から南に向かって傾斜している。埋土は淡暗褐色礫混土であり、下位により多くの礫を含む。埋土から須恵器坏や土師器甕の細片が出土した。図化することができなかったが、

古墳時代に属するものと考えられる。

第11節 05-8区の調査

1. 位置 (第1、4図)

調査区は遺跡の南西端、先にみた06-2区を含む地点である。地形的には氾濫原または沖積段丘の縁辺部に属する。府道建設に伴う発掘調査によって明らかとなった弥生時代集落の中心部から南西約150mに位置する^⑧。現況は大きく盛土のなされた更地である。トレンチは17ヵ所設定したが、遺構、遺物の確認されたトレンチは調査区の南端に設けた第1トレンチならびに第2トレンチのみであり、その他のトレンチについては比較的安定した地山やその直上の堆積層は確認されるものの、遺構や遺物包含層の存在は皆無に等しい。なお本調査区は1970年代に小規模な試掘調査が行われており、数十点の弥生土器を含む包含層の存在が指摘されるとともに、弥生時代中期の遺物が図示されている^⑨。詳細は不明であるが、今回の第2トレンチ北端にみられる遺構面に達する攪乱がかつての試掘トレンチである可能性が高い。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、8)

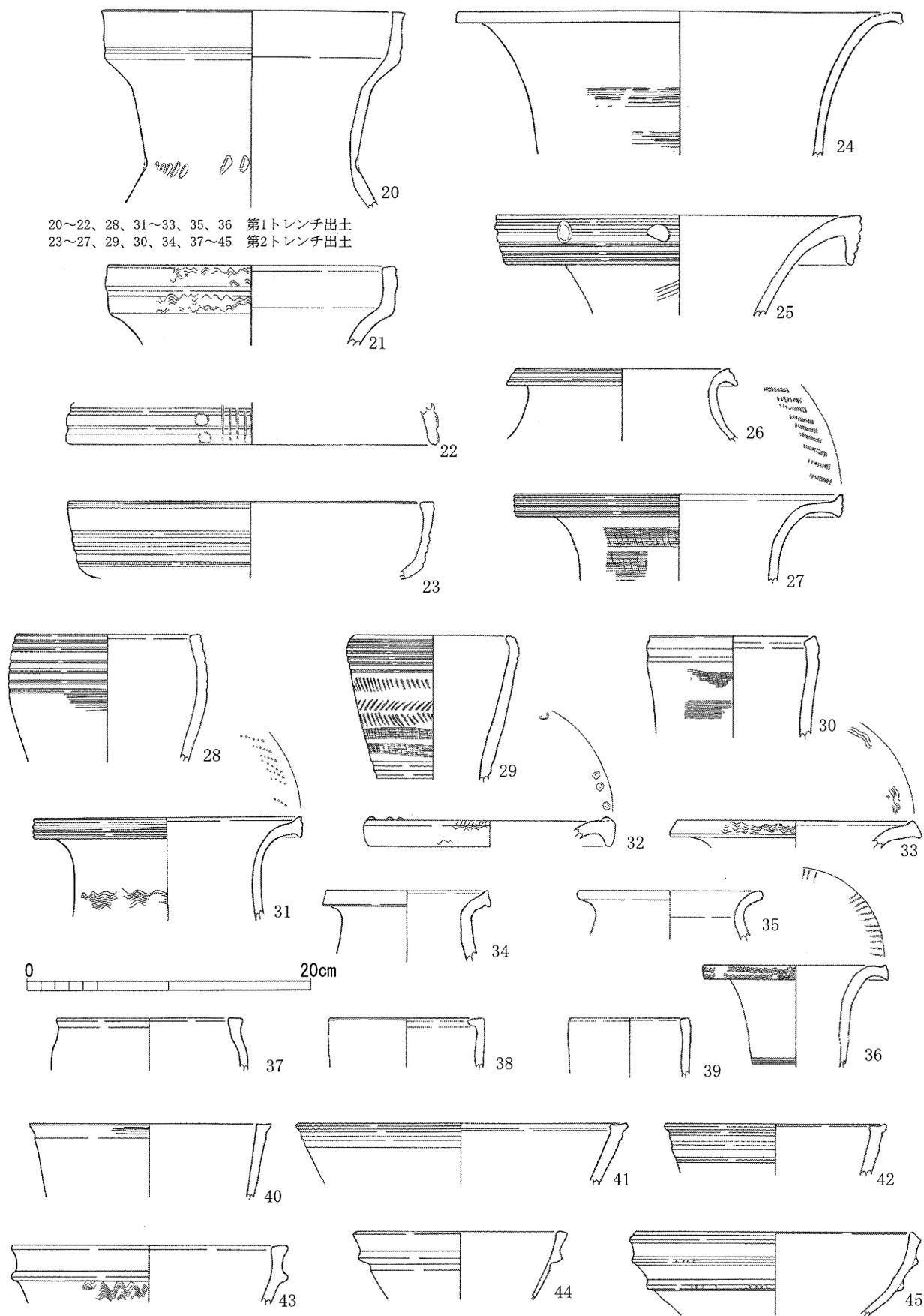
確認された層序は概ね共通している。盛土以下、淡暗灰褐色砂質シルト(2層、約15cm)、橙色混じり淡灰白色砂質土(3層、約10cm)、淡灰褐色砂質土(4層、約10cm)淡黄褐色砂質シルト(5層、約15cm)の各層が水平堆積をみせる。2層は近現代の耕作土、3層は床土、4、5層は旧耕作土である。5層直下に淡黄褐色粘土または淡暗黄褐色砂質シルト(6層、約40-50cm)がみられるが、同層は地山直上の堆積層として調査区内に広く分布するものである。

6層以下にはトレンチ北側では淡暗褐色粘土(7層、約60cm)、南半部では暗淡黄褐色砂質シルト(8層、約40-50cm)が続き、さらに第1トレンチでは暗灰褐色混じり暗褐色粘土(約20cm)、にぶい黄褐色シルト(約10cm)を経て淡灰黄褐色砂礫へと至る。第2トレンチでは7、8層直下に淡灰黄褐色砂礫が広がる。両トレンチともに7層以下の各層には多量の遺物や炭、円礫を含む。遺物は弥生時代中期のものに限定され、かつ出土状態が周辺での遺物包含層とは明らかに異なっており、両トレンチ全体が何らかの遺構に含まれるものと考えられる。

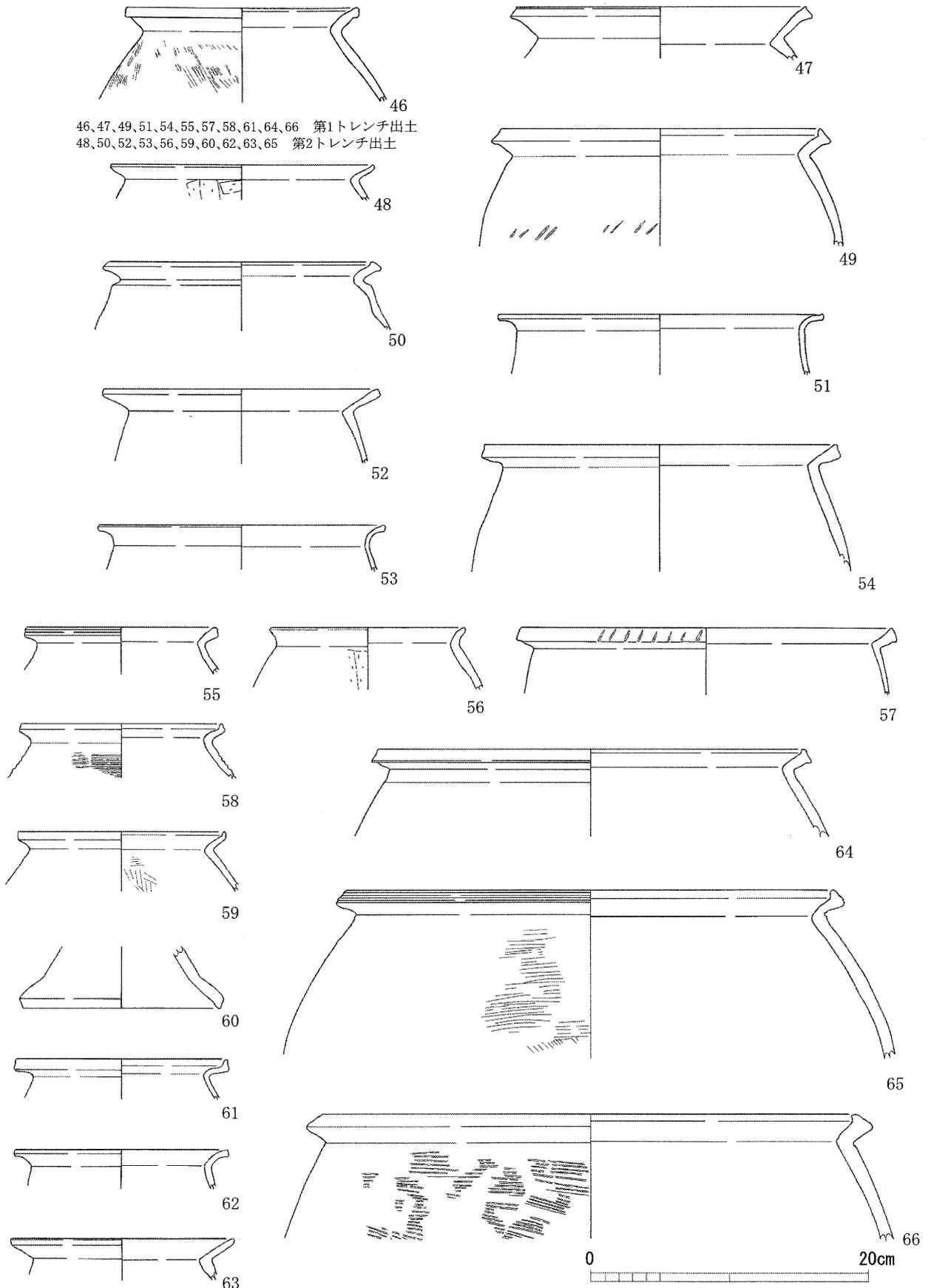
第1トレンチ中央部において砂礫面がわずかに窪んでおり、かつ砂礫上面のレベルが第1トレンチにおいて約30cm低いことから、西から東方向に向かう溝状の遺構と捉えることが可能である。しかしながら両トレンチに隣接する他のトレンチ、また第2トレンチ北側の06-2区ではまったく遺構の存在が確認されておらず、直線状に伸びるものとは考えられない。かなり蛇行しつつ東西方向に伸びる溝、もしくは南から北に伸び、両トレンチを北端とする巨大な落ち込みなどと考えられようか。また7層以下の堆積状況から、それらが流水状態にあったとは判断し難く、人為的な埋戻しに際し、多量の遺物や礫を投棄したものと考えられる。

3. 遺物 (PL. 11・12、第9-12図)

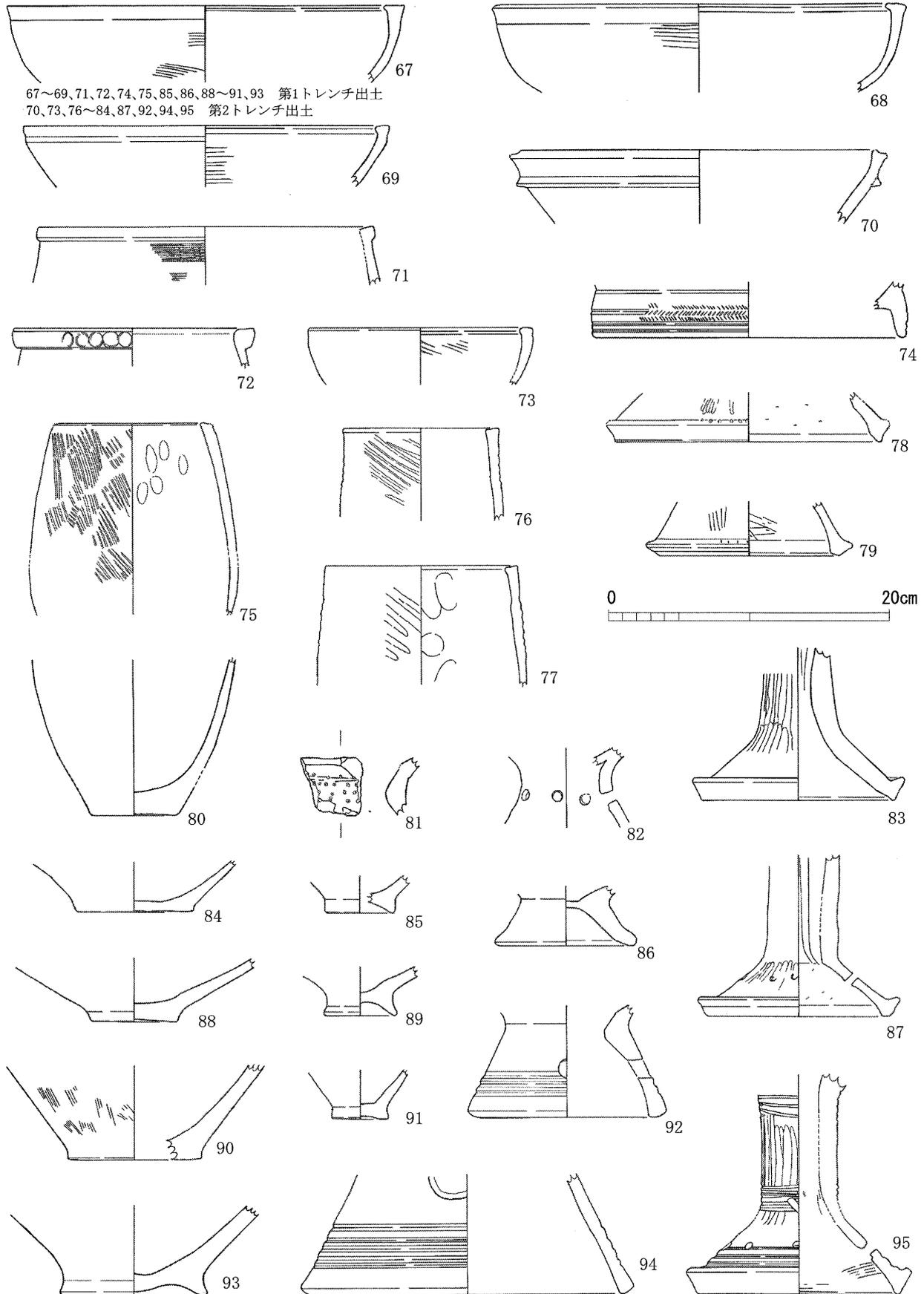
両トレンチからコンテナ約30箱分の遺物が出土している。大半が7、8層からの出土であり、出



第9図 男里遺跡 05-8区出土遺物①

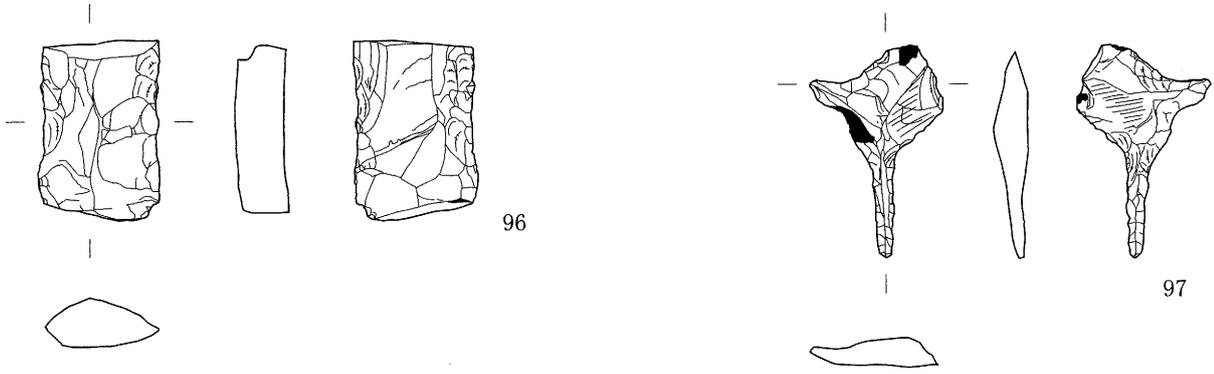


第 10 図 男里遺跡 05-8 区出土遺物②



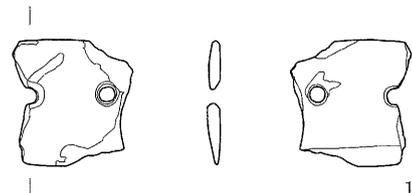
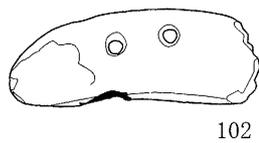
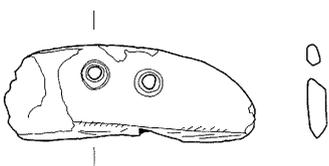
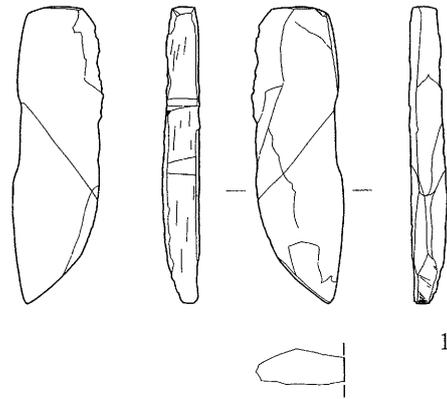
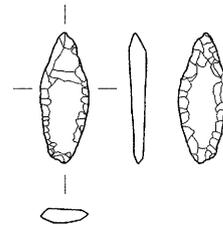
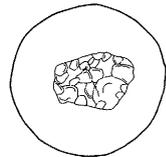
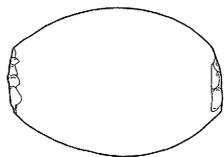
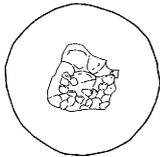
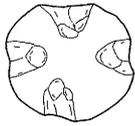
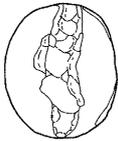
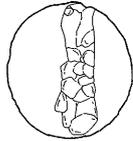
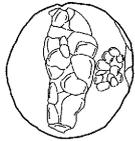
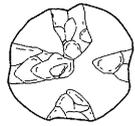
67~69, 71, 72, 74, 75, 85, 86, 88~91, 93 第1トレンチ出土
 70, 73, 76~84, 87, 92, 94, 95 第2トレンチ出土

第11図 男里遺跡 05-8区出土遺物③



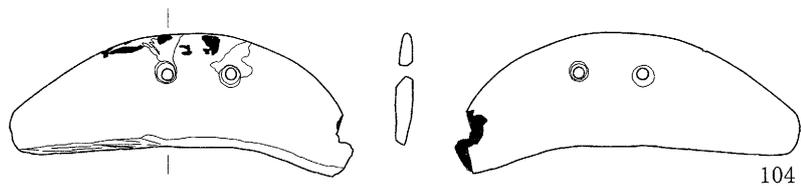
0 (S=1:2) 10cm

96-98 縮尺1/2 ■ 新しい欠損部
99-104 縮尺1/3



96、97、104 第1トレンチ出土
98-103 第2トレンチ出土

0 (S=1:3) 10cm



第12図 男里遺跡05-8区出土遺物④

土状態に差異の認められないことから、ここでは双方の遺物を同一に扱うものとする。出土遺物には土器、石器のほか、図示し得なかったが金属製品も1点含まれている。大半を占める土器には完形に復元されるものが1点もなく、小片が圧倒的に多いが、反面器壁の残存は良好なものが多くみられる。認められる器種としては壺、甕、高坏、鉢、器台、蛸壺形土器などがある。

第9図には壺を図示した。20は段状口縁壺である。外傾しつつ立上がり、端部はわずかに肥厚する。屈曲部に凹線文を1条巡らす。頸部にはヘラ刺突文が巡る。21は段状口縁壺である。わずかに内湾しつつ立ち上がるもので、外面に1条の浅い凹線文を巡らし、その上下に波状文を加える。22は広口壺である。口縁端部の垂下拡張されたもので、外面には4条以上の凹線文を巡らし、ヘラ描沈線をほぼ直角に加え、さらに円形浮文を上下に2ヵ所加える。23は段状口縁壺である。わずかに内湾しつつ立ち上がるもので、端部は肥厚し面をなす。上下端部にそれぞれ1条と4条の凹線文を巡らす。24はいわゆる日明山型壺である。直接は接合しないが図上復元することができた。緩やかに外反する口縁部をもち、端部はわずかに肥厚し面をなす。頸部には櫛描直線文が2段に巡る。ほかに同一個体と考えられる破片には直線文や扇形文が認められる。器壁の残存状態は良好であるが、反して接合する破片が少ない。25は広口壺である。大きく外反する口縁部を持ち、端部を長く垂下拡張する。拡張部はわずかに内湾しており、5条の凹線文を巡らし、円形浮文を加える。頸部にはヘラミガキが施される。26は広口短頸壺である。緩やかに外反する口縁部を持ち、端部は下方に拡張される。拡張部は外傾し2条の凹線文が巡る。27は広口壺である。大きく外反する口縁部を持ち、端部は肥厚し上方につまみ上げられる。口縁端部外面には4条の凹線文を密に巡らし、内面には斜め方向のヘラ刺突文が施される。頸部には廉状文が2段以上巡る。28は細頸壺である。口縁端部はわずかに肥厚し面をなす。上端より6条の凹線文を巡らし、凹線文直下に櫛描直線文を施す。29は細頸壺である。直線的に立上がり、端部は内傾し、丸くおさめる。上端には細かい、下端には太い凹線文を巡らし、その間に3段よりなる斜め方向の刺突文が綾杉状に加えられ、さらに下方に廉状文が施されている。30は細頸壺である。口縁端部はわずかに肥厚し、内傾する面を持つ。上端よりわずかに下がったところに1条の凹線文を巡らし、下方には櫛描廉状文と直線文を施す。31は広口壺である。大きく外反するが、屈曲は緩やかなものである。口縁端部は上下に拡張され、面をなす。端部外面には3条の凹線文が巡り、内面には斜め方向の刺突文が施される。口縁下部には櫛描波状文が巡る。32は広口壺である。端部のみであるが、下方に拡張されるもので、外面には櫛描波状文が巡り、上端にはヘラ刺突文が加えられる。内面には円形浮文のまとまりが認められる。33は広口壺である。口縁端部のみであるが、肥厚し外傾する端部が面をなし、内外面ともに櫛描波状文が巡る。精製された胎土を持ち、搬入品と考えられる。34は広口壺である。口縁部の屈曲が強く、くの字状を呈する。端部は肥厚し上下に拡張され、内傾する面をなす。外面にはわずかに擬凹線が認められる。橙色の化粧土が塗布されている。35は短頸壺である。口縁部の屈曲は緩やかであり、端部は丸くおさめる。36は広口壺である。大きく外反する口縁部を持ち、端部は肥厚し、上方につまみ上げられる。端部外面には密に波状文が巡り、内面には斜め方向の刺突文が施される。頸部下方には櫛描直線文が巡る。37は短頸壺である。口縁部の立上がりは直線的であり、端部は肥厚し、面をなす。38は直口壺である。口縁端部を内側に折り曲げ、上部は平滑に仕上げられる。40は直口壺で

ある。直線的に立上がり、端部は肥厚し、外方向につまみ上げられる。端部外面には成形時のヨコナデによる擬凹線状の平行線がみられる。橙色の化粧土が塗布される。41は直口壺である。大きく開くもので、口縁端部は肥厚しており、斜め上方へつまみ上げられる。上端に2条の凹線文を巡らす。42は直口壺である。口縁端部は肥厚し、斜め上方へつまみ上げられる。上端に3条の太い凹線文が巡る。43は直口壺である。わずかに内湾しつつ立上がり、口縁端部は肥厚し、平滑に仕上げられる。上端から少し下がった位置に断面三角形の貼付突帯が巡り、突帯の下に櫛描波状文を施す。44は直口壺である。口縁端部上端より少し下がった位置に突帯を巡らせるが、突帯成形時の強いヨコナデにより明瞭な段が形作られている。45は直口壺である。内湾しつつ立上がり、口縁端部はわずかに肥厚し、外傾する。2条の貼付突帯を巡らし、突帯には細かな刻み目が加えられる。

第10図には甕および蓋(60)を図示した。甕は口径によって大型(64-66)、中型(48, 50, 52, 53, 47, 49, 57, 54, 57)、小型(46, 55, 58, 59, 61, 62, 63)に分類できる。口縁部形態ではくの字状に強く屈曲するものが大半を占めるものの、緩やかに屈曲するもの(51, 53, 62)がみられる。さらに口縁端部の形態には端部を肥厚させるものが多くみられ、中には上下に拡張するもの(49, 64)、上方につまみ上げることにより受け口状をなすもの(58, 59, 61, 65, 66)などが認められる。50, 64は口縁屈曲部の強いヨコナデにより頸部に明瞭な段を持つ。体部外面の調整にはハケ(46)、縦位のヘラケズリ(48, 56)、タタキ(58, 65, 66)などが確認できる。59は内面にハケ調整が施される。49の体部最大経付近や57の口縁端部にはヘラ刺突文が施される。55, 65の口縁端部外面には凹線が巡る。

第11図には鉢、高坏などを図示した。67-73は鉢である。67は緩やかに立上がり口縁端部は肥厚し、平滑に仕上げられる。体部外面には横位のヘラミガキが施される。68は鉢である。口縁端部は肥厚し、内側に突起する。体部外面に横位のヘラミガキが施される。69の体部内面には横位のヘラミガキが施される。70は大きく開く体部を持ち、口縁端部は肥厚し、斜め上方につまみ上げられる。端部上端より少し下がった位置に断面三角形の貼付突帯を巡らせる。71は口縁端部に貼付段を持つもので、貼付段の直下に廉状文を2段に巡らせる。72は貼付段によって口縁端部を大きく肥厚させており、貼付段の外面には円形浮文を密に巡らせる。73は内面に斜め方向のハケ調整が施される。74は複合鉢の鉢部である。垂下部分のみしか残存しないが、4条の凹線文とヘラ状工具により綾杉状の連続刺突文が施されている。78, 79は脚台である。いずれもハの字状に開く裾部と肥厚し斜め上方に拡張された端部よりなる。外面は縦位のヘラミガキが施され、内面はヘラケズリ調整が加えられる。78は端部上端よりわずかに内側、79は裾部と端部との境に列点文が施される。81, 82, 86, 92は台付鉢の脚部である。81は鉢部へ取り付く屈曲部にあたる。屈曲部に擬凹線が巡り、平行する4段以上の列点文が加えられる。82は脚柱部中央に円孔が巡る。86はハの字状に開くもので、端部はさらに外側に屈曲する。92はわずかに内湾する脚部中央に円孔が加えられ、円孔下端より3条の凹線文が巡る。83, 87, 95は高坏脚部である。いずれも端部を肥厚拡張させ端面をなす。脚柱部より裾部に向かって縦位のヘラミガキが加えられる。87, 95は裾部中央に円孔が巡り、95の脚柱部上下端にはヘラ描沈線による擬凹線が巡り、裾部円孔の下端に接する3条の凹線が巡る。94は器台である。直線的な脚部の中央に円孔がみられ、端部より少し上に5条の

凹線文が巡る。75～77、80は蛸壺型土器である。外面はタタキ痕が明瞭に残り、内面には指頭圧痕を残す。80は底部である。摩滅しており調整は判然としないが、75のような内湾する口縁部を持つものと考えられる。84、88、90は壺の底部である。いずれも平底から大きく開いて立上がる。90にはハケ調整が施される。85、89、91、93は甕の底部である。85、89、93は上げ底を呈し、91は平底である。85の胎土には結晶片岩を多く含み紀伊産と考えられる。

第12図は石器である。96は石剣である。柄部分のみ残存している。割と大きな剥離痕を残すが、長軸の稜付近を中心に風化が進んでいる。97は石錐である。平行四辺形を呈する頭部に大小2つの錐部を備えるものである。双方の錐部には細かな調整が施されており、使用痕も両方共に認められる。98は凸基Ⅱ式の石鏃である。全体に風化している。99は砂岩製の石錘である。楕円形を呈する円礫の長軸に沿って4条の溝を穿つ。側面の一部に敲打痕が認められる。100は砂岩製の敲石である。卵型を呈する円礫の両端に敲打痕がみられる。火中し赤く変色している。101は黒色片岩製の小型の柱状片刃石斧である。片理に沿って破損しており、また刃部側面は先端を除いて欠損する。背部に挾を伴う。背部と刃部先端に使用痕がみられる。上端部に破損後の研磨痕や敲打痕がみられ、2次利用された可能性がある。他に柱状石斧と思われる小片が1点出土している。102～104は緑色片岩製の石包丁である。102は内湾する両刃を持ち、片側に使用痕がみられる。103は火中し赤く変色している。紐擦れ痕が認められる。104は内湾する片刃を持ち、刃部の中央から先端に向かって使用痕が顕著に認められる。刃側に紐擦れ痕が認められる。他に緑色片岩製の石包丁の小片が1点出土している。

- 註 ① 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅵ』（2002）
財団法人大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）
泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書』（1996）など。
- ② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅵ』（2002）
- ③ 財団法人大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）
- ④ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅴ』（2000）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅷ』（2004）など。
- ⑤ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）
- ⑥ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅣ』（1997）
財団法人大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）など。
- ⑦ ⑤と同じ。
- ⑧ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1994）
泉南市教育委員会「男里遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書』（1996）
- ⑨ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査報告書』（2005）
- ⑩ 泉南市教育委員会「男里遺跡91-13区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』（1992）
- ⑪ 泉南市教育委員会「男里遺跡00-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅧ』（2001）など。
- ⑫ 泉南市教育委員会「男里遺跡05-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅩⅢ』（2006）など。
- ⑬ ⑤と同じ。
- ⑭ 泉南市教育委員会「90-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書』（1991）など
- ⑮ ⑤と同じ。
- ⑯ 泉南市教育委員会「男里遺跡02-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅩ』（2003）
- ⑰ 泉南市教育委員会「男里遺跡99-10区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XⅧ』（2001）
- ⑱ 泉南市教育委員会「男里遺跡89-10区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1990）
- ⑲ ③と同じ。
- ⑳ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）記載の「A」地点にあたる。

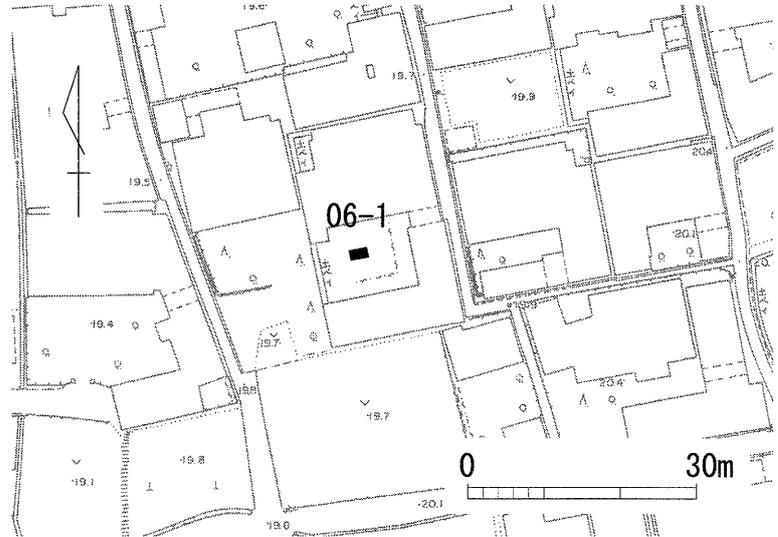
第3章 幡代遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

幡代遺跡は市域平野部の南西端に位置する。遺跡西半に現幡代集落を含み、東側は主に耕作地である。沖積地に立地するが、安定したシルト面は遺跡北東部などに限定され、他の地点では河川性の砂礫が確認されることが多い。

弥生時代^①や平安時代後期^②の資料も知られるが、実態は不明である。13世紀代には遺跡北東部から中央部に集落^③が出現するが、長くは存続せず、14世紀以降、現集落付近へ移動したものと推測される。

現集落内の調査では中世に遡る資料は少ないが、現集落から西へ外れた地点において当該期の柱穴^④が確認されており、現状よりもやや広範囲に集落が展開していた可能性がある。



第13図 幡代遺跡 06-1 区地形図

第2節 06-1 区の調査

1. 位置 (第1、13 図)

調査区は遺跡の西部、現在の幡代集落西部に位置する。地形分類では、沖積段丘に位置する。現在の幡代集落内における調査では近世以降の遺構や遺物が確認されており、周辺では北東約 50 m の 94-6 区^⑤で泥面子や土製円盤などが確認されている。現況は更地であり、トレンチは 1 ヲ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、8)

盛土を除去すると、茶褐色シルト (2 層・約 20cm)、暗褐色シルト (3 層・約 20cm)、黒褐色シルト (4 層・約 20cm) と続き、礫混じり茶褐色シルト (5 層) にいたる。4・5 層上面で精査を行ったが遺構は確認されず、4 層から土師器が出土している。

註 ① 財団法人大阪文化財センター「幡代遺跡」『大阪府下埋蔵文化財研究会 (第 30 回) 資料』(1994)

② 泉南市教育委員会「幡代遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 V』(1988)

③ ①と同じ。

泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報 No. 1』(1995)

泉南市教育委員会「幡代遺跡 03-3 区の調査」『新伝寺遺跡 91-1 区・幡代遺跡 03-3 区発掘調査報告書』(2004)

④ ②と同じ。

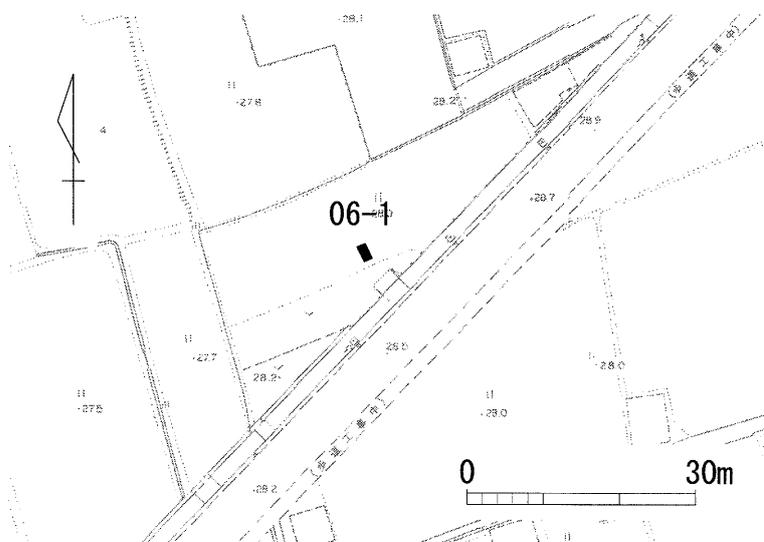
⑤ 泉南市教育委員会「幡代遺跡 94-6 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X III』(1996)

第4章 幡代南遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

幡代南遺跡は市域平野部の南西端、地形的には古金熊寺川によって形成された扇状地扇頂部のやや北西に位置し、全域が沖積段丘に含まれる。

現幡代集落と岡中集落の間に広がる耕作地にあたり、そのため1993年度に府道敷設に伴う発掘調査^①が遺跡の北西部において実施された以外は、調査はおろか届出すらもほとんどみられない。府道部分の調査では、中世末期以降に開発された複数の耕作面や弥生時代中期前葉に埋没した大規模な河道などが確認されている。



第14図 幡代南遺跡 06-1 区地形図

第2節 06-1 区の調査

1. 位置 (第1、14図)

調査区は遺跡の南東部にあって、府道と歌山貝塚線「岡中」交差点より約250m南西に位置する。現況は休耕地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、9)

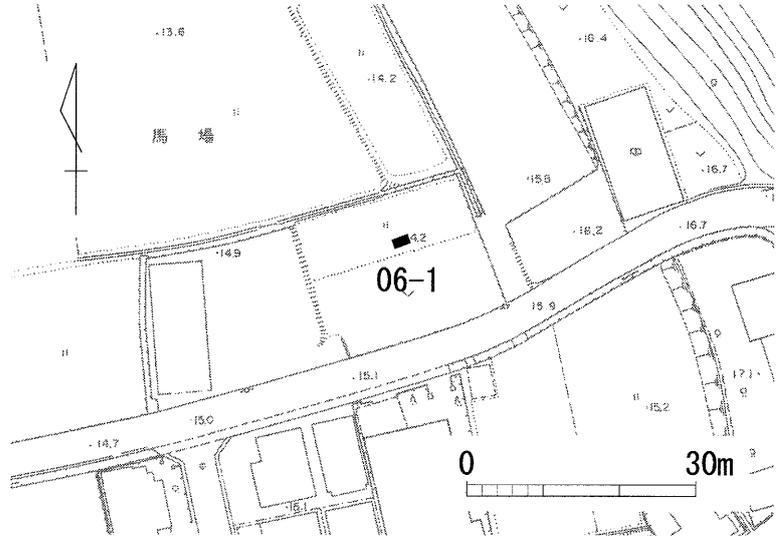
耕作土である淡暗灰褐色土(1層、約20cm)を除去すると、灰褐色混じり暗橙色土(2層、約20cm)、暗褐色混じり暗灰褐色砂質土(3層、約10cm)がほぼ水平に堆積する。2層は1層に伴う床土、3層は旧耕作土である。これら耕作土の下に黒灰色礫混シルト(4層、約30cm)、淡黒灰色礫混土(5層、約40cm)の2層が若干の凹凸を持って堆積し、さらににぶい黄褐色混じり暗褐色礫の地山に至る。4層以下はいずれも円礫またはクサリレキを多量に含み、軟弱な河川性堆積を示す。4層上面より須恵器、土師器細片がわずかに出土している。4、6層上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。

註 ① 田中一広「幡代南遺跡・幡代遺跡の調査」『歴研通信 1993年立冬号』泉南市歴史研究会(1993)
財団法人大阪文化財センター「幡代南遺跡」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第30回)資料』(1994)

第5章 長山遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

長山遺跡は市域平野部の中央西寄りにあって、洪積段丘の縁辺部に沿って伸びる長山丘陵の西麓に位置する。地形的には沖積段丘が遺跡の西半を占め、北東部は中位段丘、南東部は丘陵となっており、このうち段丘については、現馬場集落の北東に隣接する耕作地として利用されている。これまでに数件の調査^①が行われているが、いずれも丘陵先端の西側に集中している。そこでは耕作に関連する遺構が確認され、時期的には明確ではないものの中世以降の開発を示唆するものと考えられている。



第15図 長山遺跡 06-1区地形図

第2節 06-1区の調査

1. 位置 (第1、15図)

調査区は遺跡の北部に位置する。現馬場集落の北東に広がる耕作地にあって、いわゆる「信長街道」に南面する地点である。地形的には丘陵の先端から沖積段丘および中位段丘との交点に立地しているものと考えられる。現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、9)

盛土以下、淡灰褐色混じり暗橙色シルト (2層、約10～15cm)、暗橙色シルト (3層、約10cm)、淡黄褐色粘土 (4層、約20～30cm) と続き、地山である明灰色混じり明褐色粘土へと至る。このうち2、3層は床土であり、2層上面にわずかに耕作土が残る箇所もある。3層はマンガン粒を多く含み、また断面観察において、耕作痕かと思われる窪みがみられることから、耕作面のベースをなすものと考えられる。地山上面に少なからず起伏が存在しており、耕地化に伴う客土と考えるのが妥当であろうか。地山上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。また遺物は出土しなかった。

註 ① 泉南市教育委員会「長山遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)
泉南市教育委員会「長山遺跡 96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
泉南市教育委員会「長山遺跡 98-1区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書XVI』(1999)

第6章 氏の松遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

氏の松遺跡は市域中央部、低位段丘の北東縁辺に位置する。遺跡の南東から北西にかけて市道市場岡田線が縦断し、市道の北東側は宅地として、南東側は耕作地として利用されている。これまでに市道建設に伴う調査^①をはじめとして、個人住宅等に伴い数件の調査^②が行われている。

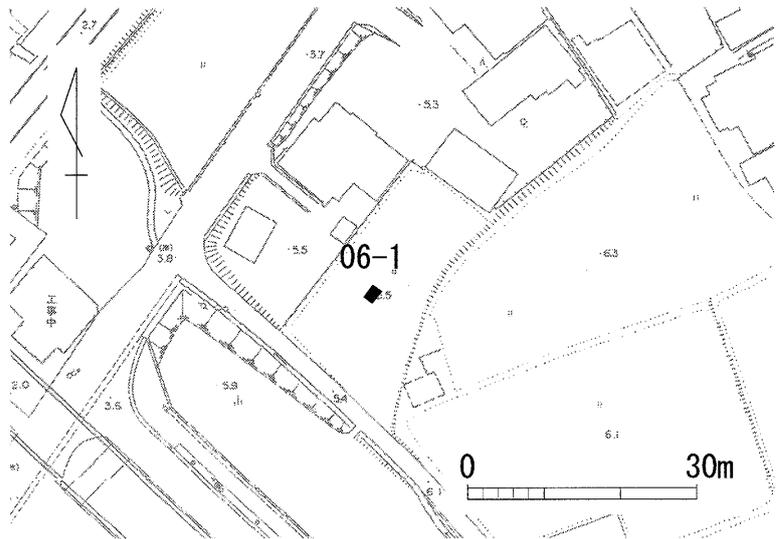
遺跡の南半では中世以降の耕作面が確認され、北側では弥生時代前期中葉の集落が確認されている。集落は掘立柱建物のみで構成され、中には棟持柱を持つ掘立柱建物が数棟含まれる。また瀬戸内地方からの搬入品と考えられる土器を伴い、胎土分析によっても在地のものとは異なる結



第16図 氏の松遺跡・中小路西遺跡・岡田遺跡・岡田東遺跡・川原遺跡調査区位置図

果^④が得られている。こうした遺構や遺物は、地域への弥生文化の伝播が画一的ではなかったことを具体的に示す、非常に貴重な例である。

この集落は極めて短期間で廃絶しており、以降中世に至るまで明確な土地利用は窺えない。13世紀初頭に灌漑用水路が設置されることによって、はじめて段丘面の本格的な開発が開始される。確認されている灌漑用水路や耕作溝は現在みられる地割の方向とも合致し



第17図 氏の松遺跡 06-1 区地形図

ており、周辺は中世以降連続と耕作地であったことが明らかである。また14世紀末には一時的に井戸による取水形態を採用している。近世以降、遺跡の北端部では煉瓦生産に供するため粘土採掘が盛んに行われている。

第2節 06-1 区の調査

1. 位置 (第16、17 図)

調査区は遺跡の北端部にあって、市道市場岡田線と府道鳥取吉見泉佐野線との交差点の南東部に位置する。地形的には低位段丘の北縁部に立地する。現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、9)

盛土以下、淡灰褐色砂質シルト (2層、約5-10cm) がほぼ水平に堆積し、地山であるにぶい黄褐色礫混土へと続く。2層は旧耕作土とも考えられ、わずかに土師器極細片を含むが、取り上げ不能であった。ほかに遺物はまったくみられない。3層上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。

- 註 ① 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』(1995)
 ② 泉南市教育委員会『氏の松遺跡 91-1 区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)
 泉南市教育委員会『氏の松遺跡 99-1 区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』(2001)
 泉南市教育委員会『氏の松遺跡 02-1 区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書XX』(2003)
 ③ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・IV』(1999)

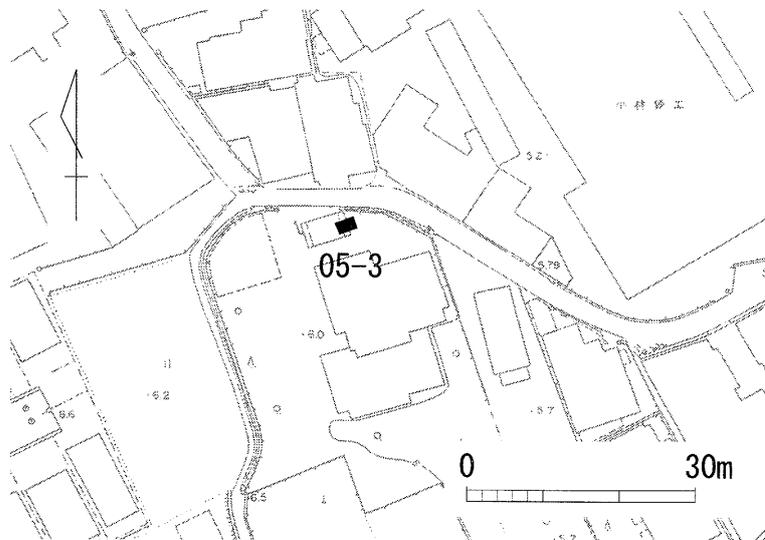
第7章 岡田遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

岡田遺跡は市域平野部の北東部にあって、現岡田集落の南西側に広がる。遺跡東半部が宅地や工場地であり、西半は耕作地となる。地形的には低位段丘の北東隅にあたり、遺跡の北縁に氾濫原や砂丘を含む。

遺跡中央部において凹基式石鏃や古代の須恵器^①が散見されるが、実態は不明である。北東部を中心として中世の遺構、遺物^②が確認されており、周辺に集落の存在が確実視される。かえって遺跡

の南東部においては耕地境界の落ち^③や灌漑用井戸^④などが確認されており、中世以降の土地利用に大きな変化が無かったことを示す。



第18図 岡田遺跡 05-3 区地形図

第2節 05-3 区の調査

1. 位置 (第16、18図)

調査区は遺跡の北東端部にあって、現岡田集落の南東部に位置する。地形的には低位段丘の縁辺部に立地する。現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、10)

盛土以下、トレンチ東端部にのみ耕作土である暗灰褐色土(2層、約15cm)が残存するが、全体的には淡黄褐色砂(3層、約15cm)が広がる。さらにトレンチ北半部に暗灰褐色シルト(4層、約5-10cm)を経て、地山である暗黄褐色礫混土および淡灰褐色礫へと続く。各層は若干の起伏を有するもののほぼ水平堆積を呈する。地山上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。また遺物は出土しなかった。

注 ① 泉南市教育委員会「岡田遺跡 91-2 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)

泉南市教育委員会「岡田遺跡 90-3 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)

② 泉南市教育委員会「岡田遺跡 「97-1、2 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)

③ 泉南市教育委員会「岡田遺跡 94-2、3、4 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)

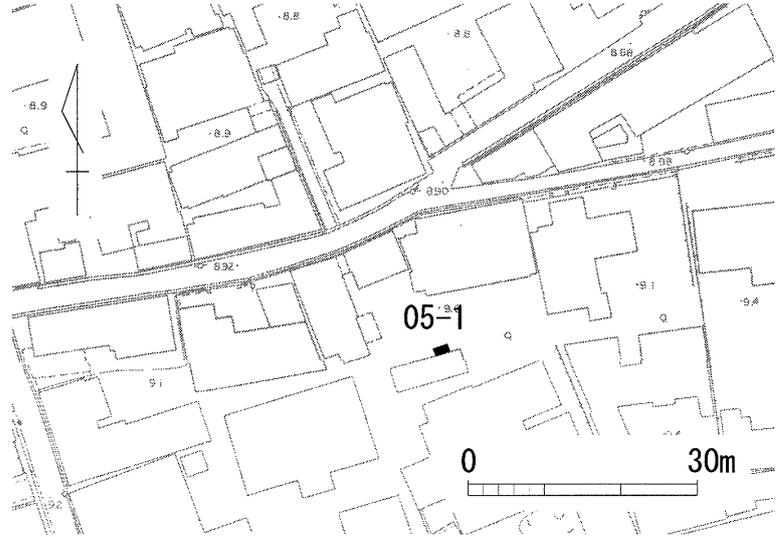
④ 泉南市教育委員会「岡田遺跡 94-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)

第8章 岡田東遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

岡田東遺跡は市域の北東部に位置し、樫井川左岸の氾濫原と低位段丘との境界に立地する。現北野集落の北東部と重なり、かつ遺跡範囲の狭いこともあって、本調査区の東約70mに位置する91-1区^①を除けば調査は行われていない。

91-1区では縄文時代から7世紀初頭に至る幅広い時期の遺構が確認されている。中でも6世紀末の竪穴住居や掘立柱建物、7世紀初頭の大型掘立柱建物が注目される。竪穴住居は3棟確認され、うち2棟は切り合う。竪穴住居には1棟ないし2棟の掘立柱建物が付随する。大型建物は南に庇を有する5×4間の東西棟であり、面積は100㎡を超える。こうした成果は、劇的ともとれる集落の構造変化を如実に示すものであって、主体や社会環境の変化を抜きにしては考えられない。またこれらの事象はひとつ岡田東遺跡だけでは理解できるものではなく、南東約1kmに所在する海会寺跡^②などとの関連を踏まえた考察が必要である。



第19図 岡田東遺跡 05-1区地形図

第2節 05-1区の調査

1. 位置 (第16、19図)

調査区は遺跡の北西部に位置する。府道堺阪南線「北野東」交差点の北西約100mに位置し、現北野集落の北西縁にあたる。地形的には低位段丘の縁辺に立地する。現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、10)

盛土を除去すると直ちに暗橙色礫混土による地山が露呈する。上面が若干軟弱であったので、少し掘り下げたが状況に変化はみられなかった。遺構、遺物は確認されなかった。

注 ① 泉南市教育委員会「岡田東遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』(1993)

② 海会寺東側に展開する集落は7世紀初頭に出現しているが、寺院創建(7世紀後半)以前の建物には小規模なものが多い。岡田東遺跡の大型建物は8世紀初頭と中葉に展開する大型建物に匹敵する規模を持つ。

泉南市教育委員会『海会寺-海会寺遺跡発掘調査報告書』(1987)

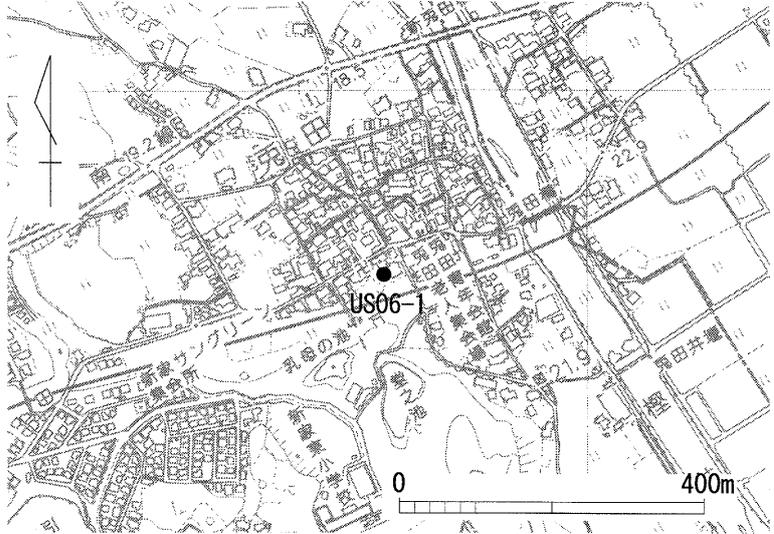
第9章 兎田遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

兎田遺跡は市域平野部の南東隅に位置する。遺跡の中央から東に現兎田集落を含み、東端は榎井川河道と接する。遺跡の西側は耕作地として利用されている。地形的には榎井川左岸の沖積地に立地し、大半を沖積段丘が占めるが、遺跡の北東部に旧河道が、南西隅には新家古墳群の展開する丘陵を含む。

現集落内を中心として数次の調査が行われている。集落の初源を中世と考える遺物包含層のほ

か、わずかにピットなどの遺構^①が確認されている。またほぼすべての地点において砂礫を基盤層とする結果が得られており、想像以上に旧河道もしくは氾濫原が広がっている可能性が指摘される。



第20図 兎田遺跡調査区位置図

第2節 06-1区の調査

1. 位置 (第20、21図)

調査区は遺跡の南東部に位置し、遺跡東半部を占める現兎田集落の南西部に所在する。南にはJR阪和線を挟んでフキアゲ山東遺跡、フキアゲ山古墳を載せる丘陵がせまる。地形的には榎井川左岸の沖積段丘に属する。周辺では北西約90mに95-1区が、西約120mに95-2区が位置している。いずれも中世遺物包含層が確認され、95-1区ではピットが確認されている。

本調査区は善照寺の境内に含まれ、現本堂の西に接する。現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

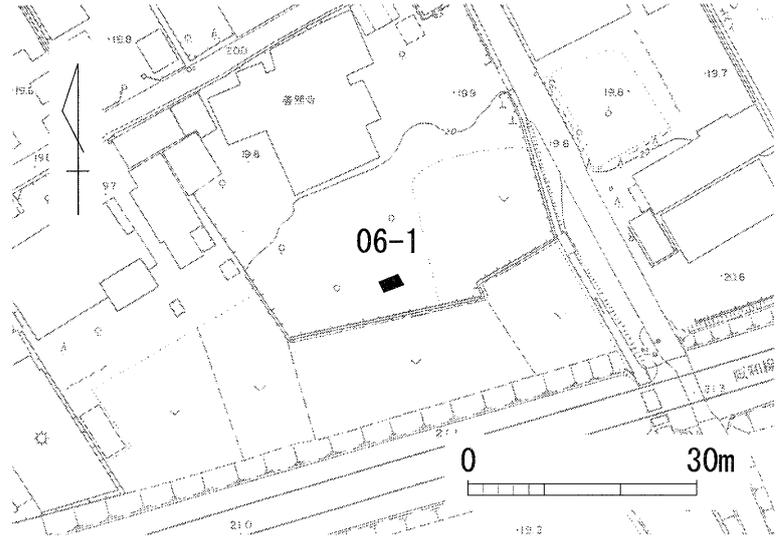
2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、10)

盛土を除去すると、部分的に耕作土である淡暗灰褐色土および床土である暗橙色シルトが確認され、さらに淡褐色混じり暗灰褐色砂質シルト(4層、約20cm)、暗灰褐色混じり暗橙色土(5層、約10cm)、暗橙色砂質シルト(6層、約10-20cm)の各層がほぼ水平堆積をみせる。いずれも旧耕作土と床土であると考えられるものであり、5層上面にはわずかに耕作痕が確認される。

6層以下の状況は、基本的には淡灰褐色混じり暗褐色砂質土(7層、約40cm)が広がるもの

の、トレンチ北東部においては7層を切り込むように暗褐色混じり淡灰褐色土（8層、約一30cm）が堆積しており、落ち込みもしくは溝状の遺構である可能性もある。同層は拳大一人頭大の円礫を多く含む。同様にトレンチ西端で見られる淡灰褐色砂質土も7層をベースとする遺構である可能性がある。

7層以下には暗黄灰色砂質シルトが全面に拡がり、一定の面を成している。これまでとは大きく状況が異なり、自然堆積によるものと考えられるが、地山であるとの確証は得られなかった。上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。5層および7層より瓦器、瓦質土器、土師器の細片が出土した。



第 21 図 兎田遺跡 06-1 区地形図

註 ① 泉南市教育委員会「兎田遺跡 95-1、2 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X III』（1996）

第8章 まとめ

本書では、平成18年1月1日より同12月31日までの間に、文化財保護法に基づく発掘届出等に基づいて行われた発掘調査および確認調査、ならびに昨年度未報告分を合わせた17件について報告している。以下にこれらの調査成果を概観し、今年度のまとめとしたい。

男里遺跡では今年度9件の調査が行われ、本書ではうち7件と昨年度実施の3件について報告している。現男里集落内の調査が大半を占めるが、集落の北西縁部や、これまであまり開発の及ばなかった遺跡南端部においても調査を実施し、大きな成果を挙げることができた。

06-1区は遺跡南端部に位置する。弥生時代中期の遺物を多く含む堆積層が確認され、平面的には不明であるが、堆積状況から遺構埋土と考えることのできるものであった。男里弥生集落の拡がりを知る大きな手掛りとなるものである。

06-1区の北西約150mに位置する05-8区においても、弥生時代中期の遺物が多量に出土し、平面的には不明なものの遺構の一部である可能性の高いものであった。同区第2トレンチの北に隣接する06-2区においては遺構ベースと考えられる砂礫層が確認されたが、遺構の存在を伺わせるものは全く見当たらなかった。砂礫上面の比高は06-2区が約80cm高く、南に向かって急激に落ち込んでいることが明らかである。両区の間約5mに遺構の北肩が存在するのであろうか。遺物は出土量に反して完形に復元されるものは1点もないが、器壁表面の残存が良好なものが少なからず含まれおり、人為的に破砕したものを投棄した結果とも捉えることが可能である。こうした知見は府道敷の調査における「大溝」^①と共通する部分が多く、06-1区と同様、弥生集落全体像の解明には欠かせない、重要な成果であると位置づけられる。

次に現男里集落内の調査に目を向けてみたい。06-3区は現男里集落の南西端に位置し、かつて霞提が存在した地点に近接する。調査では互層をなす砂礫層が確認され、時期不明ながらも霞提の作用によるものと推定されるに至った。砂礫を整地し近現代の耕作面が形成されていることから、さほど遠くない時期の堆積と判断されるものである。

05-7区は現男里集落の南東端に位置する。遺構埋土より古墳時代後期の遺物が出土しており、古墳時代の集落が周辺に存在する可能性が高くなった。今後の調査に期待が持たれる。

06-4、5、6区は現集落西端において互いに近接している。いずれも不安定な砂礫の地山を整地し、耕地化していることが明らかとなり、既往の調査を追認することができた。中でも06-4区で出土した中世瓦は整地業の上限を示すものといえ、注目される。

05-6区は現集落の北端に位置する。隣接する市道敷の調査^②において多くの成果が得られていることから、本調査区の内容が注目された。古墳時代遺構面に対応するシルト層は部分的にしか存在せず、直下に河川性の礫層が拡がることから、調査区は氾濫原の中に点在した微高地のまさに縁辺部に位置するものと考えられるに至った。

06-7区は現集落の北端に接する耕作地に位置する。調査では古墳時代後期の遺物が確認された。浅い谷状の窪地から出土したもので、平面プランから北東側に開口する様子がうかがえる。同時期の遺構は、調査区南東側約50mの市道敷の調査（B区）で6世紀代の竪穴住居などが確認

されている^③。当該時期の集落北辺を取り巻く谷地形の南西端であったのかもしれない。ただ、今回の調査成果だけでは、遺物が示す年代に埋没したのかどうかは判断しかねる。というのも、他のトレンチでは遺構および遺物が確認されていないことや、遺物が少量でしかも破片がほとんどで接合するものがないこと、埋土に不自然な礫が含まれることから、後世の人為的な埋め戻しの結果混入した可能性も考えられるためである。

幡代遺跡 06-1 区は、現幡代集落西側に位置する。現集落内の調査では中世に遡る遺構や遺物はほとんど知られないが、調査区南西 50 m の地点において中世の瓦類^④が確認されていることから、当該時期の遺構などが確認されることが期待された。調査では、おそらく中世と考えられる包含層が確認されたが、遺構は確認されていない。また、5 層以下は礫層であることから、02-3 区^⑤で確認されているような河川に起因する自然地形が本調査区付近まで及ぶ可能性が指摘でき、中世以前には居住に適さない不安定な地形であったことが想定できる。

幡代南遺跡では遺跡南東部において 1 件の調査が行われた。旧耕作面直下に軟弱な砂礫層が確認されたことで氾濫原に立地していることが明らかとなった。従来段丘と考えられていた地点であり、より詳細な旧地形を解明するための資料が獲得されたといえよう。また砂礫層上面より中世と思しき遺物が出土していることから耕地開発の開始時期を知る手がかりとなる。

長山遺跡では遺跡北西部において 1 件の調査が行われた。地山直上に整地とも取れる客土を施し、耕地となしていることが確認された。時期的には不明であり、調査区の南に広がるものと想定される中世の耕地に含まれるものかどうかは明らかにできなかった。今後の調査を待ちたい。また本調査における地山層は、上面より -30cm ほど掘削すると湧水がみられることから、長山丘陵に平行して開析する谷地形の埋土である可能性もある。

氏の松遺跡では遺跡の北端部において 1 件の調査が行われた。調査では耕土直下に地山が露呈し、元来の層序は既に削平を受けていた。99-1 区^⑥や市道敷近接地点^⑦と同じく粘土採掘にかかるもので、近代以降の営為によるものと考えて間違いないだろう。

岡田遺跡では昨年度未報告分の 1 件を報告している。砂礫を多く含む地山が確認され、樫井川によって形成された氾濫原が周辺にまで及んでいたことを示すものであった。詳細な旧地形を知る貴重な手がかりが得られた。

岡田東遺跡では昨年度未報告分の 1 件を報告している。古墳時代後期の遺構面^⑧である地山が確認されたが、削平により包含層や旧耕作土などはまったく存在しなかった。

兎田遺跡では 1 件の調査が行われた。旧耕作土以外に中世包含層が知られたことは大きな成果である。同層をベースとする遺構の存在が示唆されること、またその下層にも安定面が存在することなど、今後の調査の指標となりうる多くの手掛りを得ることができた。

註 ① 財団法人大阪府文化財センター『男里遺跡』(2005)

② 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)

③ ②と同じ。

④ 泉南市教育委員会「幡代遺跡 94-6 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X III』(1996)

⑤ 泉南市教育委員会「幡代遺跡 02-3 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X X』(2003)

⑥ 泉南市教育委員会「氏の松遺跡 99-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X VIII』(2001)

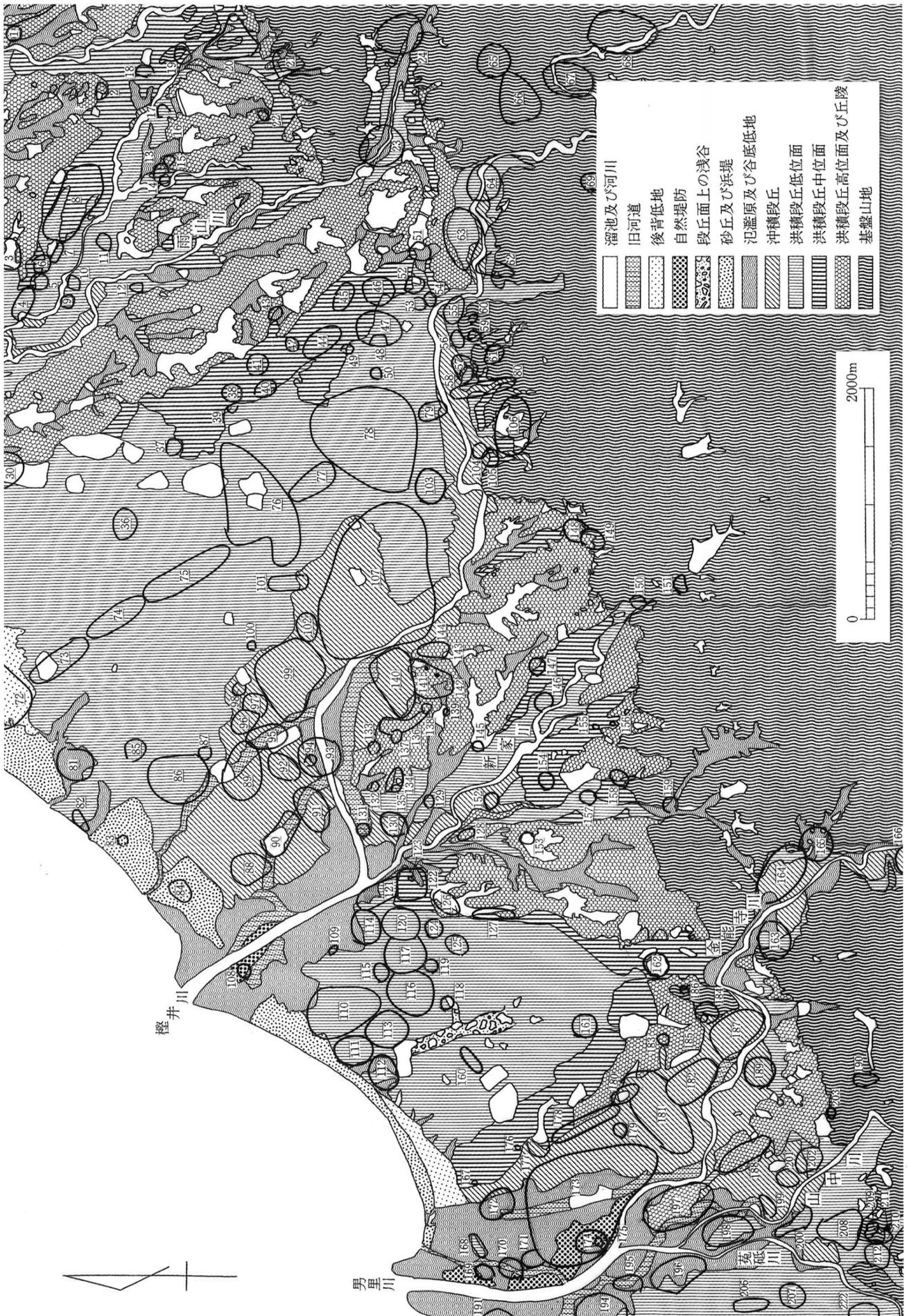
⑦ 泉南市教育委員会『岡田西遺跡・氏の松遺跡発掘調査報告書』(1995)

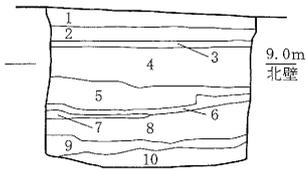
⑧ 泉南市教育委員会「岡田東遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X』(1993)

第5表 文化財一覧表

1	正法寺跡	47	野々宮遺跡	93	櫻井城跡	139	引谷池窯跡	185	林昌寺瓦窯跡
2	小垣内遺跡	48	総福寺天満宮本殿	94	奥家住宅	140	兎田遺跡	186	林昌寺銅鐸出土地
3	大谷池遺跡	49	宮ノ前遺跡	95	道ノ池遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	187	岡中遺跡
4	大久保B遺跡	50	垣外遺跡	96	岡ノ崎遺跡	142	フキアゲ山1号墳	188	高田山古墳群
5	下高田遺跡	51	屯田遺跡	97	中菖蒲遺跡	143	フキアゲ山2号墳	189	岡中西遺跡
6	紺屋遺跡	52	八王子遺跡	98	岸ノ下遺跡	144	兎田古墳群	190	雨山南遺跡
7	口無池遺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	99	諸目遺跡	145	池尻遺跡	191	福島遺跡
8	東円寺跡	54	日根神社遺跡	100	城ノ塚古墳	146	中の川遺跡	192	尾崎海岸遺跡
9	降井家屋敷跡	55	西ノ上遺跡	101	禅興寺跡	147	岩の前遺跡	193	馬川北遺跡
10	大久保C遺跡	56	川原遺跡	102	ダイジョウウ寺跡	148	別所北遺跡	194	馬川遺跡
11	中家住宅	57	母山遺跡	103	上之郷遺跡	149	別所遺跡	195	下出北遺跡
12	大久保A遺跡	58	母山近世墓地	104	向井代遺跡	150	高野遺跡	196	室堂遺跡
13	五門北古墳	59	向井山遺跡	105	意賀美神社本殿	151	昭和池遺跡	197	平野寺(長楽寺)跡
14	五門遺跡	60	鏡塚古墳	106	向井池遺跡	152	上村遺跡	198	向出遺跡
15	五門古墳	61	梨谷遺跡	107	三軒屋遺跡	153	狐池遺跡	199	高田西遺跡
16	大浦中世墓地	62	笹ノ山遺跡	108	川原遺跡	154	上野中道遺跡	200	向山遺跡
17	大浦遺跡	63	土丸遺跡	109	岡田東遺跡	155	宮遺跡	201	高田南遺跡
18	甲田家住宅	64	土丸南遺跡	110	岡田遺跡	156	宮南遺跡	202	和泉鳥取遺跡
19	久保B遺跡	65	雨山城跡	111	氏の松遺跡	157	芋掘遺跡	203	雨山遺跡
20	鳥羽殿城跡	66	土丸城跡	112	座頭池遺跡	158	石ヶ原遺跡	204	内畑遺跡
21	墓の谷遺跡	67	下大木遺跡	113	岡田西遺跡	159	高倉山南遺跡	205	皿田池古墳
22	来迎寺本堂	68	大木遺跡	114	新伝寺遺跡	160	本田池遺跡	206	正方寺遺跡
23	池ノ谷遺跡	69	稲倉池北方遺跡	115	中小路北遺跡	161	上代石塚遺跡	207	西畑遺跡
24	成合寺遺跡	70	大西遺跡	116	中小路西遺跡	162	信之池遺跡	208	自然田遺跡
25	山ノ下城跡	71	松原遺跡	117	中小路遺跡	163	滑瀬遺跡	209	玉田山遺跡
26	山出遺跡	72	中開遺跡	118	坊主池遺跡	164	六尾遺跡	210	玉田山古墳群
27	上瓦屋遺跡	73	末廣遺跡	119	中小路南遺跡	165	六尾南遺跡	211	玉田山須恵器窯跡
28	湊遺跡	74	安松遺跡	120	北野遺跡	166	金熊寺遺跡	212	寺田山遺跡
29	壇波羅密寺跡	75	長滝遺跡	121	一岡神社遺跡	167	専徳寺遺跡	213	黒田西遺跡
30	壇波羅遺跡	76	植田池遺跡	122	海会寺跡	168	天神ノ森遺跡	214	鳥取北遺跡
31	佐野王子跡	77	郷ノ芝遺跡	123	海会寺瓦窯	169	キレト遺跡	215	鳥取遺跡
32	上町東遺跡	78	日根野遺跡	124	大苗代遺跡	170	高田遺跡	216	鳥取南遺跡
33	市場東遺跡	79	机場遺跡	125	仏性寺跡	171	男里北遺跡	217	黒田南遺跡
34	若宮遺跡	80	棚原遺跡	126	海堂宮池遺跡	172	戎畑遺跡	218	神光寺(蓮池)遺跡
35	上町遺跡	81	羽倉崎東遺跡	127	市場遺跡	173	男里遺跡	219	三味谷遺跡
36	俵屋遺跡	82	羽倉崎遺跡	128	向井山遺跡	174	光平寺跡	220	三升五合山遺跡
37	北尻遺跡	83	嘉祥神社本殿	129	新家遺跡	175	光平寺石造五輪塔	221	小口谷遺跡
38	岡口遺跡	84	道ノ池遺跡	130	下村遺跡	176	樽井南遺跡	222	井関遺跡
39	中嶋遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	131	下村北遺跡	177	男里東遺跡	223	石田山遺跡
40	小塚遺跡	86	船岡山遺跡	132	下村1号墳	178	長山遺跡	224	西鳥取遺跡
41	十二谷遺跡	87	岡本廃寺	133	新家オドリ山東遺跡	179	山ノ宮遺跡	225	戎遺跡
42	丁田遺跡	88	田尻遺跡	134	新家オドリ山遺跡	180	前田池遺跡	226	貝掛遺跡
43	新池尻遺跡	89	船岡山南遺跡	135	下村2号墳	181	幡代遺跡	227	金剛寺遺跡
44	大坪遺跡	90	夫婦池遺跡	136	新家古墳群	182	幡代南遺跡	228	塚谷古墳群
45	市堂遺跡	91	櫻井西遺跡	137	新家オドリ山南遺跡	183	奥ノ池遺跡		
46	北ノ前遺跡	92	藤波遺跡	138	フキアゲ山西遺跡	184	林昌寺跡		

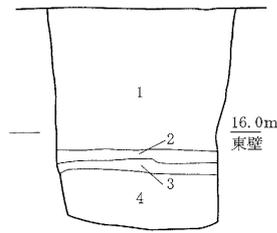






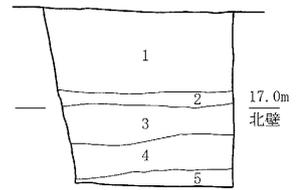
1. 盛土
2. 淡暗灰褐色砂質土 (耕作土)
3. 暗橙色混じり淡灰褐色砂質土 (床土)
4. 淡黄灰色砂質シルト
5. 淡褐色砂礫
6. 淡褐色砂
7. 黄灰褐色砂質土
8. 5層と同じ
9. 7層と同じ
10. 5層と同じ

ON06-3区断面図



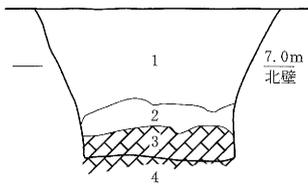
1. 盛土
2. 暗灰色土 (耕作土)
3. 暗橙色混じり灰白色砂質土 (床土)
4. 灰褐色礫混土

ON06-2区断面図



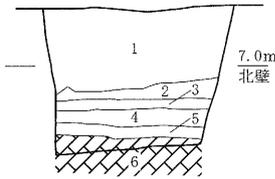
1. 盛土
2. 黄橙色混じり淡灰褐色土 (床土)
3. 暗褐色シルト
4. 淡褐色砂質シルト
5. 淡褐色砂礫

ON06-1区断面図



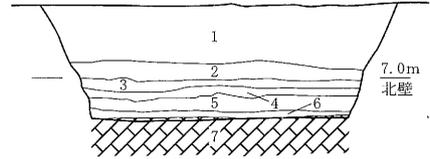
1. 盛土および攪乱
2. 淡灰褐色混じり淡褐色砂質土
3. 淡灰褐色礫混土
4. 褐色砂礫

ON06-6区断面図



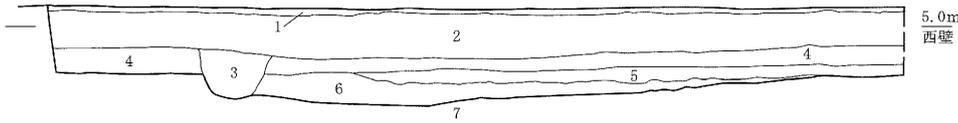
1. 盛土
2. 灰褐色砂質シルト (耕作土、3層ブロック少含)
3. 暗橙色混じり淡灰褐色砂質土 (床土)
4. 淡褐色砂質土 (旧耕作土)
5. 褐色混じり淡灰褐色土
6. 淡灰褐色礫混土～砂

ON06-5区断面図



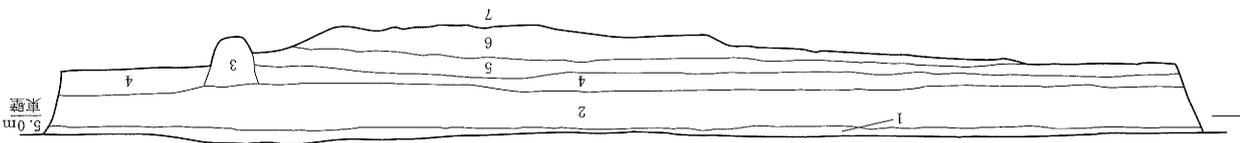
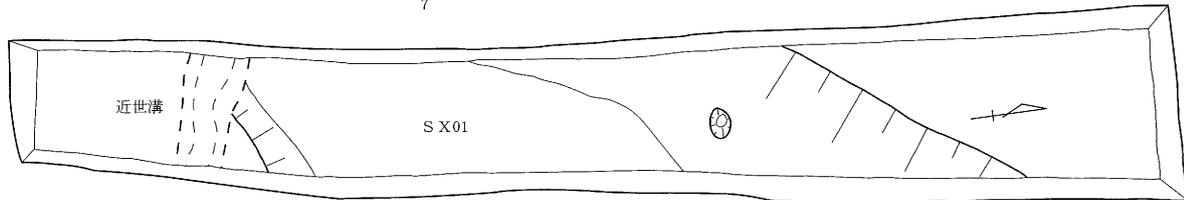
1. 盛土
2. 淡暗灰褐色シルト (耕作土)
3. 淡灰褐色混じり暗橙色土 (床土)
4. 淡灰褐色砂質土 (旧耕作土)
5. にぶい黄褐色混じり淡灰褐色砂質土
6. 淡明褐色砂質土
7. 淡灰褐色砂

ON06-4区断面図



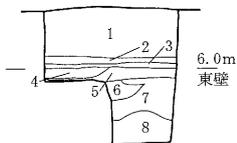
1. 黒褐色シルト
2. 灰褐色シルト
3. 灰色細砂混灰色シルト
4. 褐色シルト
5. 灰褐色シルト
6. 黒褐色シルトに灰褐色シルトが筋状に混入
7. 黄褐色シルト

ON06-7区第2トレンチ平面図および断面図

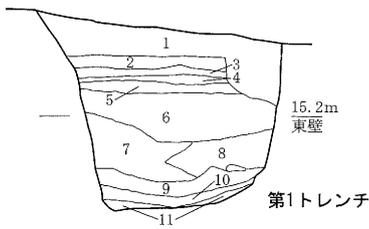


1. 盛土
2. 淡暗灰褐色土 (耕作土、Fe粒多含)
3. 暗灰白色砂質土
4. 淡黄白色砂質土 (床土、Mg粒多含)
5. 灰白色砂質土 (旧耕作土、Mg粒多含)
6. 淡灰褐色混じり暗黄褐色シルト (Mg粒含)
7. 暗灰褐色礫混土
8. 暗灰褐色砂礫

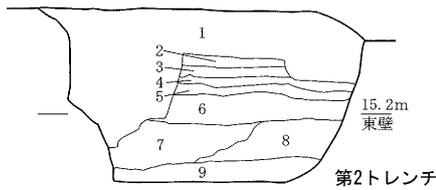
ON05-6区断面図



PL. 4 男里遺跡②、幡代遺跡、幡代南遺跡、長山遺跡
氏の松遺跡、岡田遺跡、岡田東遺跡、兎田遺跡調査区

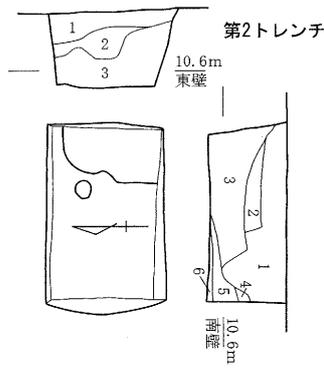


1. 盛土および攪乱
2. 淡暗灰褐色砂質シルト (耕作土)
3. 橙色混じり淡灰白色砂質土 (床土)
4. 淡灰褐色砂質土
5. 淡黄褐色砂質シルト
6. 淡黄褐色粘土
7. 淡暗褐色粘土
8. 暗淡黄褐色砂質シルト
9. 暗灰褐色混じり暗褐色粘土
10. にぶい黄褐色シルト
11. 淡灰黄褐色砂礫



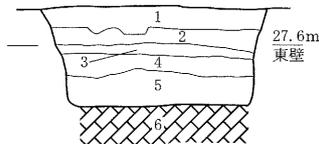
1. 盛土および攪乱
2. 淡暗灰褐色砂質シルト (耕作土)
3. 橙色混じり淡灰白色砂質土 (床土)
4. 淡灰褐色砂質土
5. 淡黄褐色砂質シルト
6. 暗淡黄褐色砂質シルト
7. 淡暗褐色粘土
8. 暗淡黄褐色砂質シルト
9. 淡灰黄褐色砂礫

ON05-8区断面図



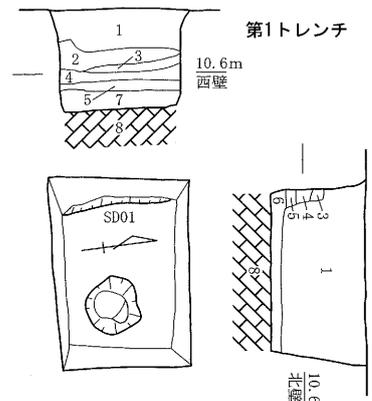
1. 表土および盛土
2. 淡黄灰褐色砂質シルト
3. 灰白色砂質シルト
4. 淡灰褐色砂質シルト (旧耕作土)
5. 橙色混じり灰褐色土 (床土)
6. 灰白色土 (Mg粒多含)

ON05-7区平面図および断面図



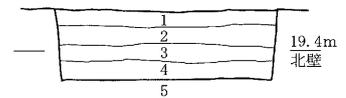
1. 淡暗灰褐色土 (耕作土)
2. 灰褐色混じり暗褐色土 (床土)
3. 暗褐色混じり暗灰褐色砂質土 (旧耕作土)
4. 黒灰色礫混シルト
5. 淡黒灰色礫混土
6. にぶい黄褐色混じり暗褐色礫

HTS06-1区断面図



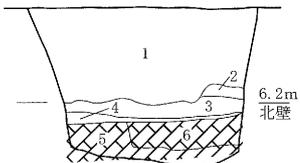
1. 盛土および攪乱
2. 暗灰褐色シルト (耕作土)
3. 淡灰褐色砂質シルト
4. 褐色混じり淡灰褐色砂質シルト (旧耕作土)
5. 暗黄灰褐色シルト (床土)
6. 黄灰色礫混土
7. 淡暗褐色礫混シルト
8. 暗黄褐色粘土

HT06-1区断面図



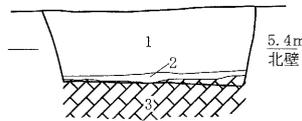
1. 褐灰色シルト
2. 茶褐色シルト
3. 暗褐色シルト
4. 黒褐色シルト
5. 茶褐色シルト混礫

HT06-1区断面図



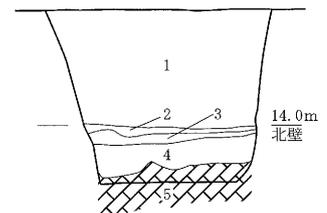
1. 盛土
2. 暗灰褐色土 (耕作土)
3. 淡黄褐色砂
4. 暗灰褐色シルト (黄白色、暗赤褐色ブロック含)
5. 暗黄褐色礫混土
6. 淡灰褐色礫

OKD05-3区断面図



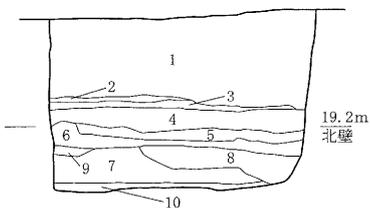
1. 盛土
2. 淡灰褐色砂質シルト (耕作土)
3. にぶい黄褐色礫混土

UJ06-1区断面図



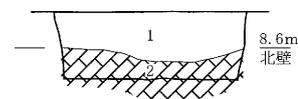
1. 盛土
2. 淡灰褐色混じり暗褐色シルト (床土)
3. 暗褐色シルト (Mg粒僅含、床土)
4. 淡黄褐色粘土 (Mg粒含)
5. 明灰色混じり明褐色粘土

NG06-1区断面図



1. 盛土
2. 淡暗灰褐色土 (耕作土)
3. 暗褐色シルト (床土)
4. 淡褐色混じり暗灰褐色砂質シルト (旧耕作土)
5. 暗灰褐色混じり暗褐色土 (床土)
6. 暗褐色砂質シルト (床土)
7. 淡灰褐色混じり暗褐色砂質土
8. 暗褐色混じり淡暗灰褐色土
9. 淡灰褐色砂質土
10. 暗黄灰色砂質シルト

US06-1区断面図



1. 盛土
2. 暗褐色礫混土

OKDE05-1区断面図





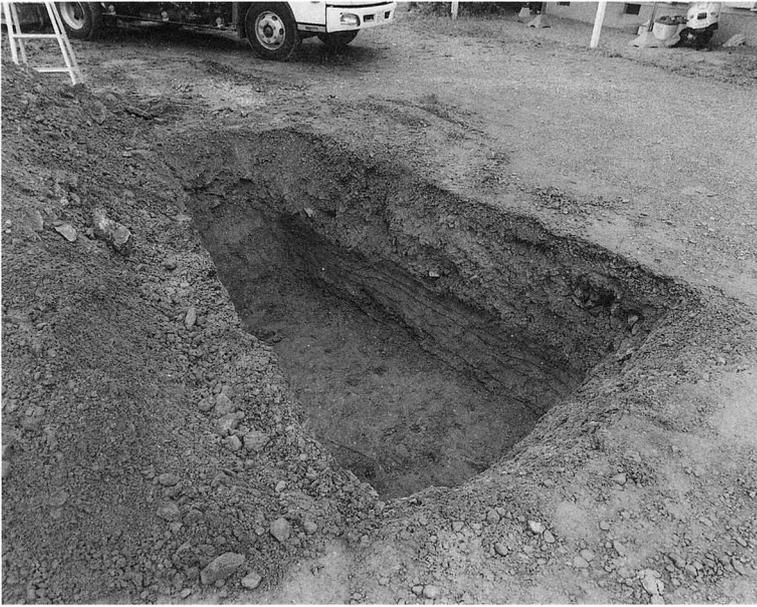
ON06-1区
(南東から)



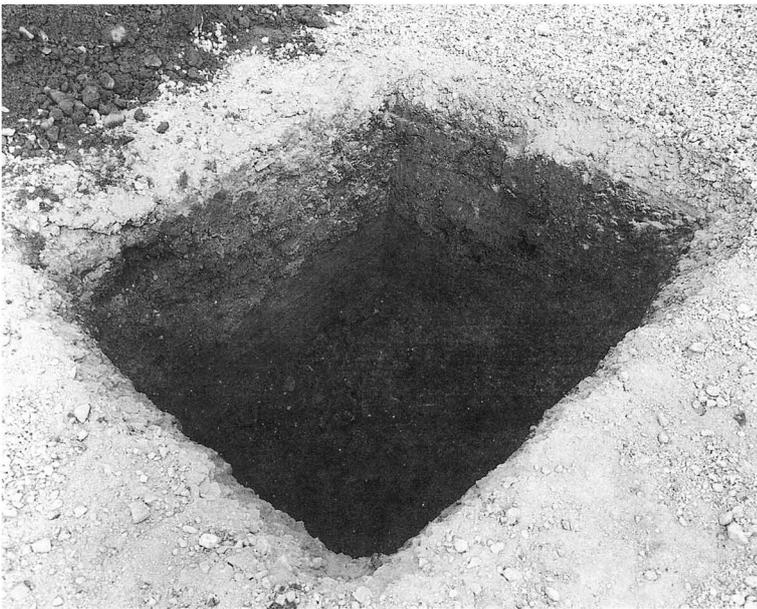
ON06-2区
(南西から)



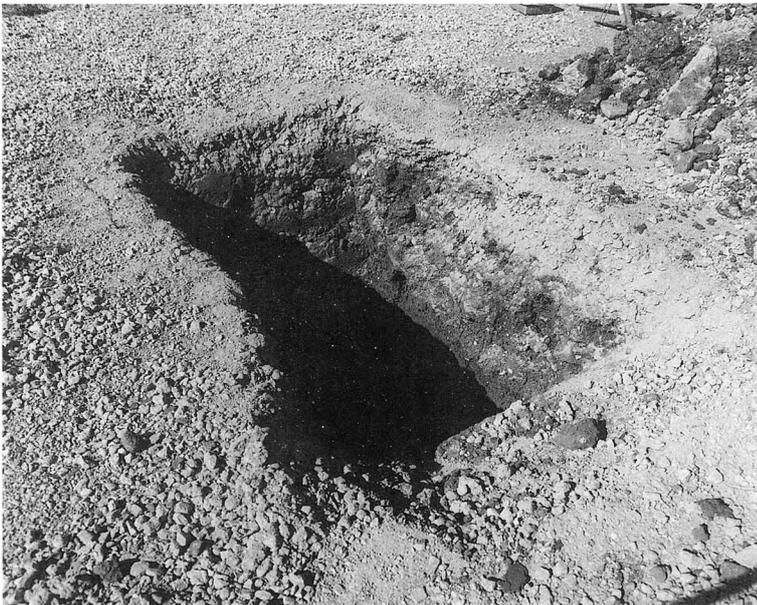
ON06-3区
(南東から)



ON06-4区
(南東から)



ON06-5区
(南西から)

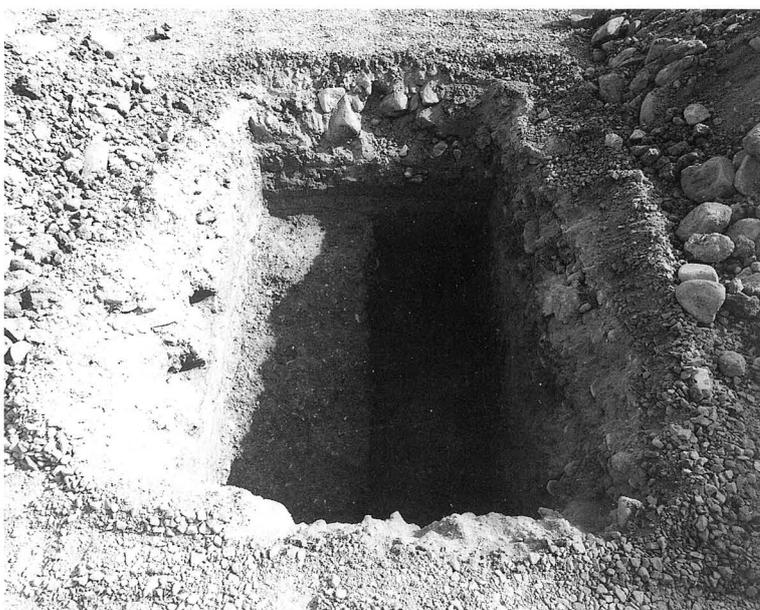


ON06-6区
(北西から)

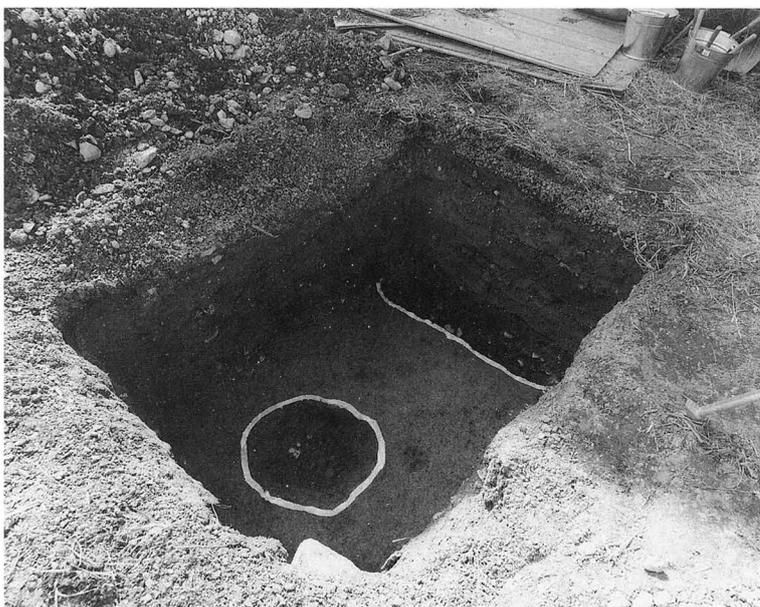
ON06-7区
第2トレンチ
(南西から)

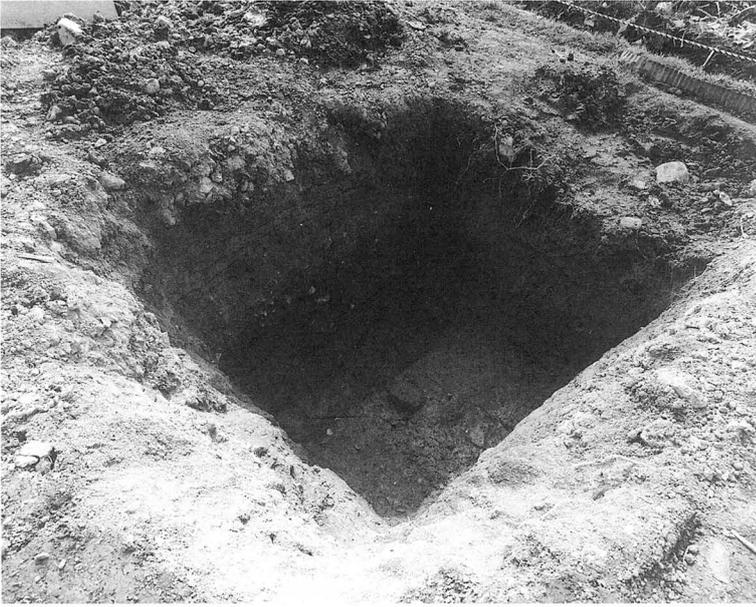


ON05-6区
(西から)



ON05-7区
第1トレンチ
(南東から)

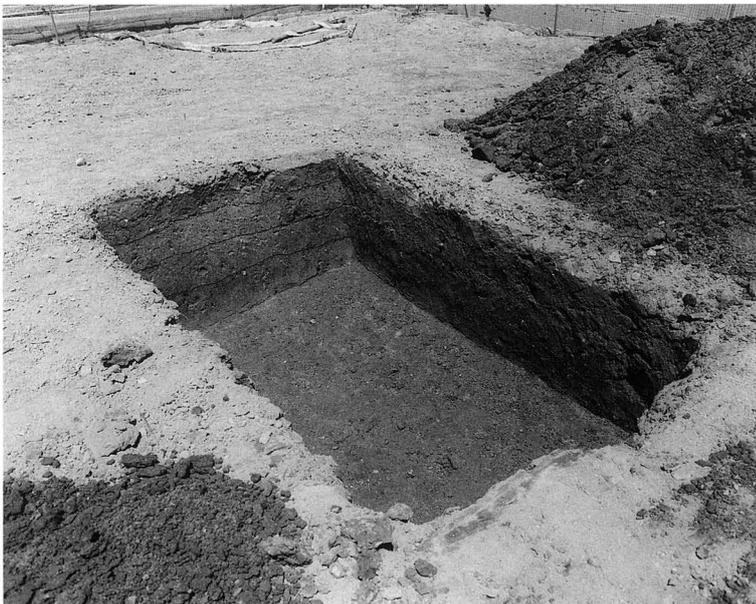




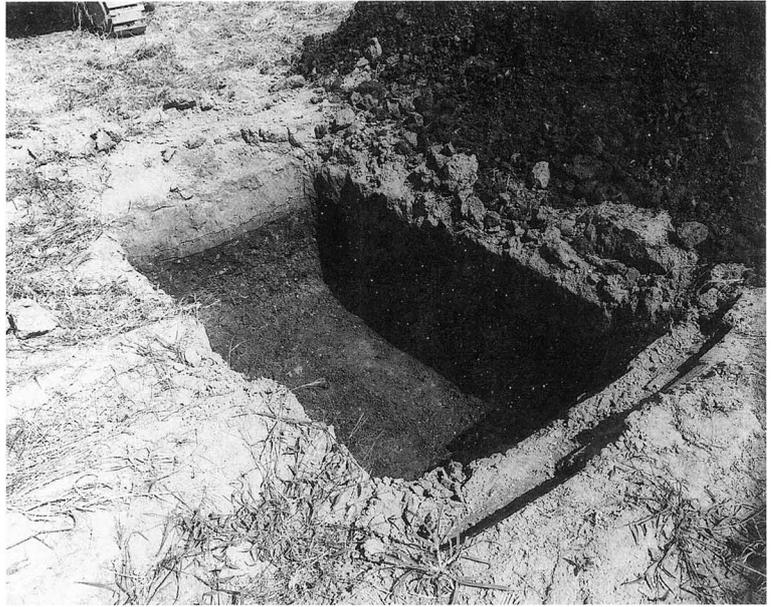
ON05-8区
第1トレンチ
(北西から)



ON05-8区
第2トレンチ
(北西から)



HT06-1区
(南東から)



HT S 06-1区
(南西から)



NG 06-1区
(南東から)



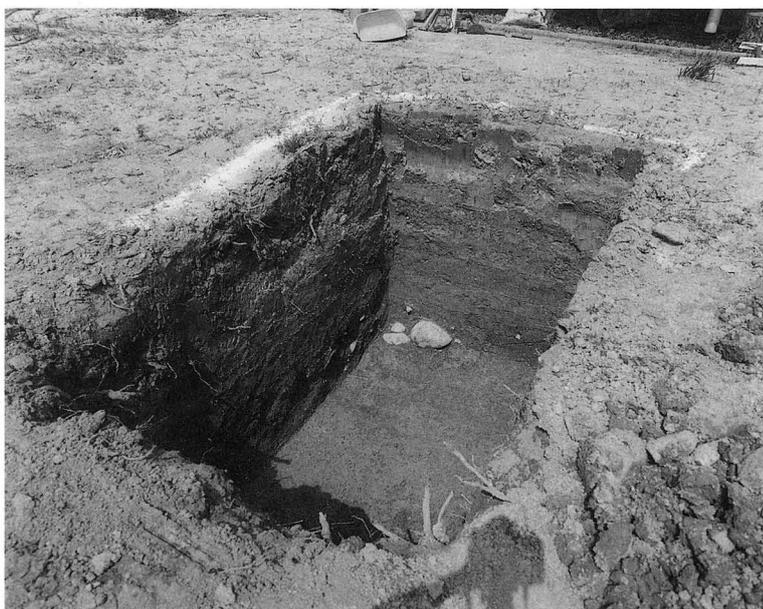
U J 06-1区
(南西から)



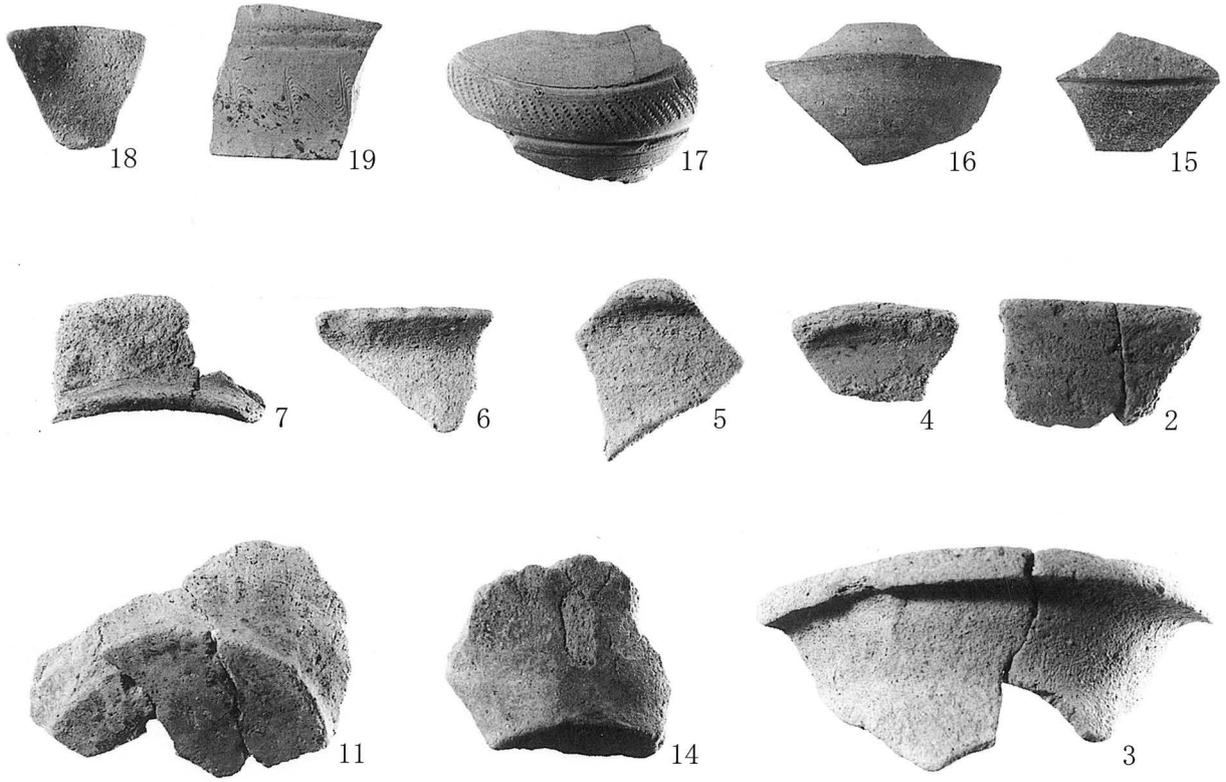
OKD05-3区
(東から)



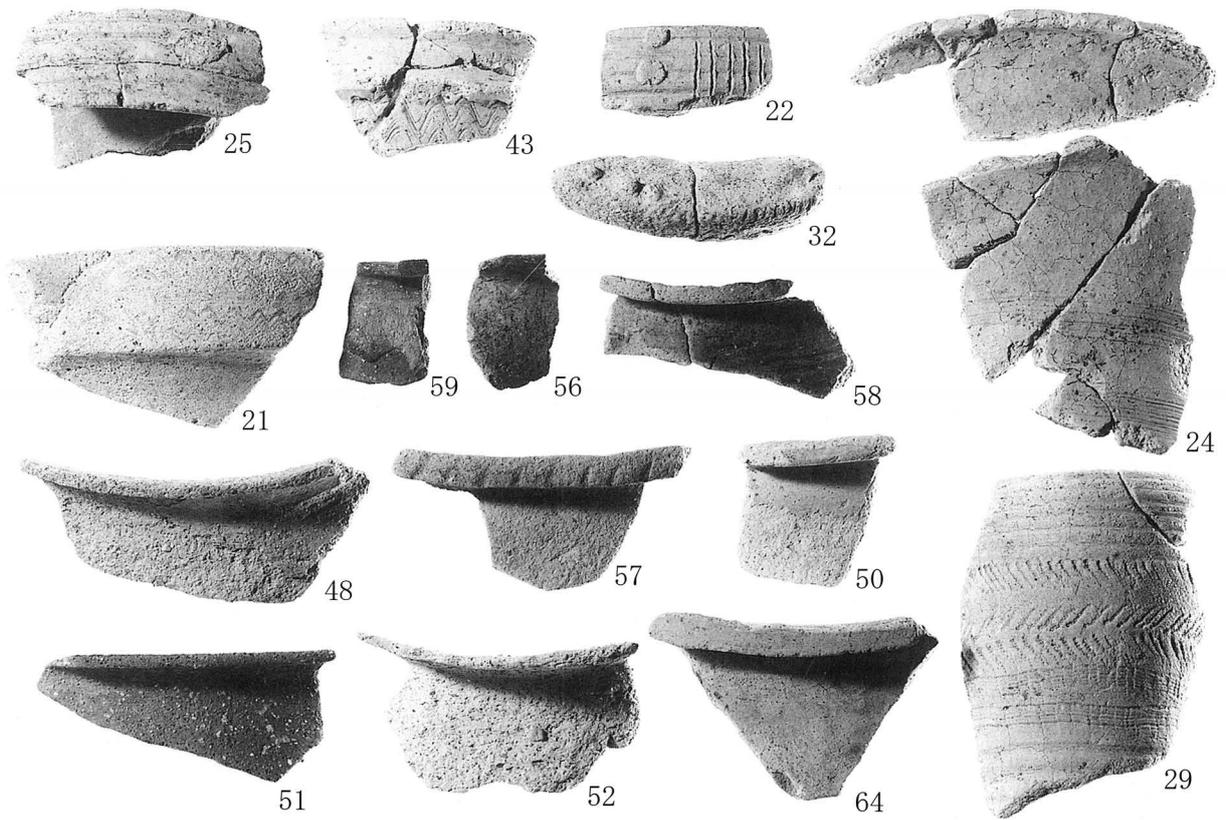
OKDE05-1区
(南西から)



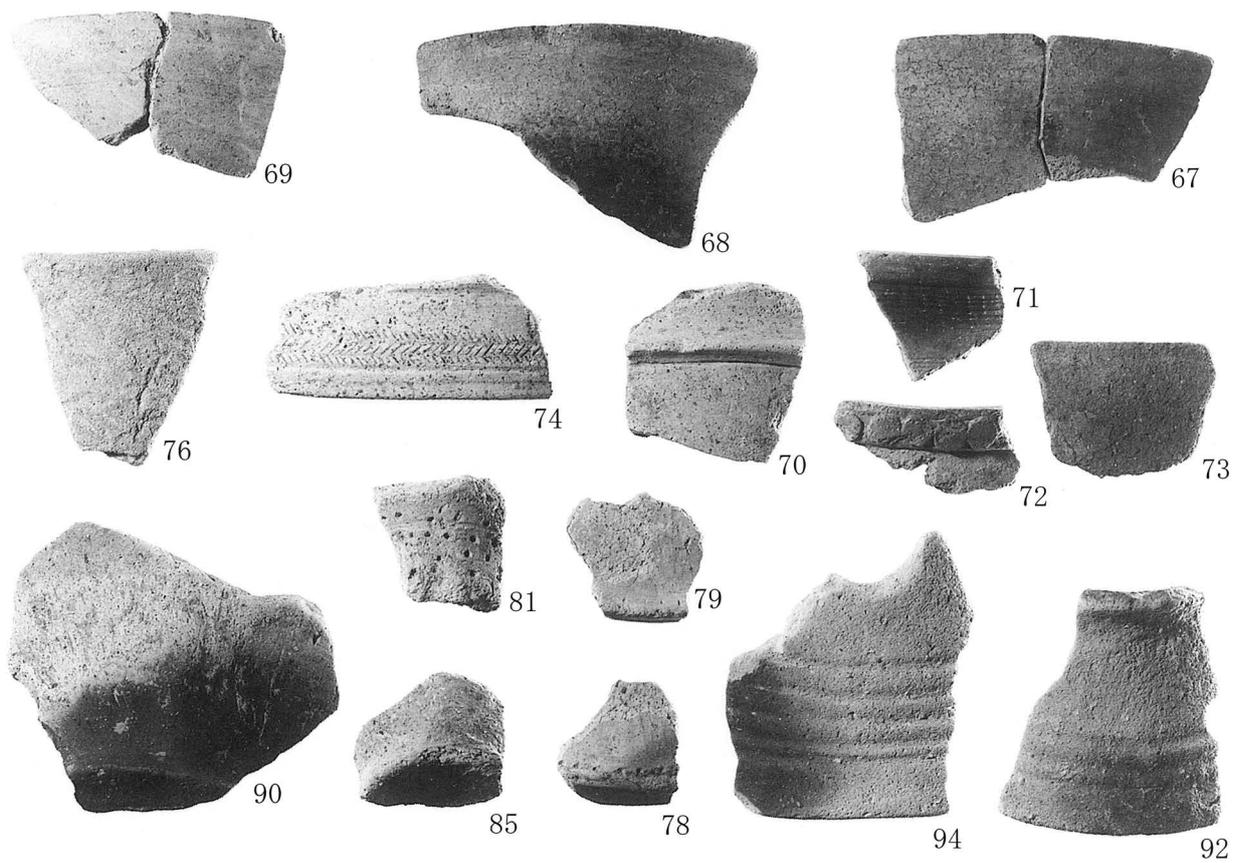
US06-1区
(南西から)



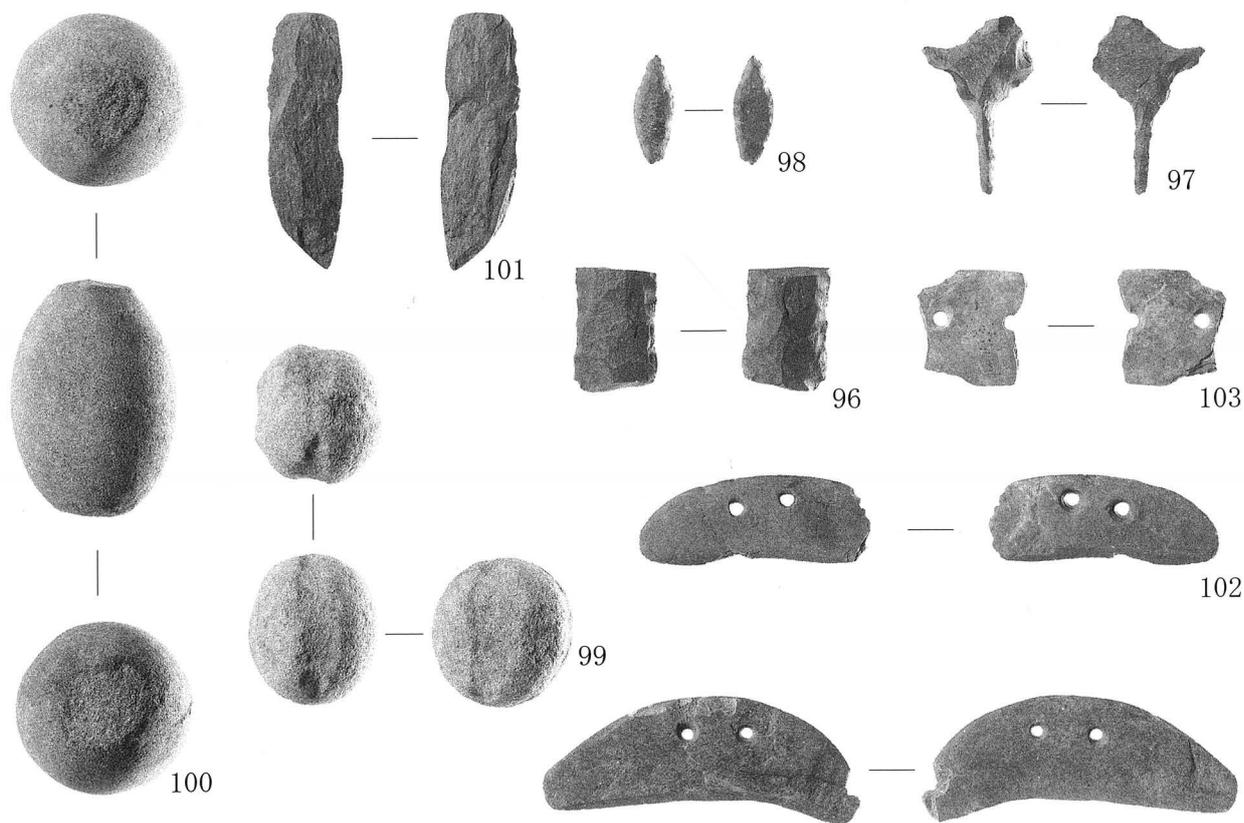
ON06-1・7区出土遺物



ON05-8区出土遺物①



ON05-8区出土遺物②



ON05-8区出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	せんなんし いせきぐん はくつちょうさほうこくしょ 24								
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書								
副書名	-								
巻次	XXIV								
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第47集								
編著者名	石橋広和・城野博文・河田泰之								
編集機関	泉南市教育委員会								
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市樽井1丁目1番1号 Tel.072-483-0001								
発行年月日	西暦2007年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡						
おのさと 男里遺跡	おおさかふせんなんしおのさと 大阪府泉南市男里	27228	ON	34度21分41秒	135度15分30秒	06-1 200608	3	個人住宅	
						06-2 200611	4	個人住宅	
						06-3 200612	4	個人住宅	
						06-4 200610	6	共同住宅	
						06-5 200611	4	個人住宅	
						06-6 200611	4	個人住宅	
						06-7 200604	56	宅地造成	
						05-6 200601	4	個人住宅	
						05-7 200602	5	個人住宅	
05-8 200602-3	94	宅地造成							
はたしろ 幡代遺跡	おおさかふせんなんしはたしろ 大阪府泉南市幡代	27228	HT	34度21分20秒	135度16分00秒	06-1 200607	4	個人住宅	
はたしろみなみ 幡代南遺跡	おおさかふせんなんししんだちおかなか 大阪府泉南市信達岡中	27228	HTS	34度21分11秒	135度16分13秒	06-1 200609	4	個人住宅	
ながやま 長山遺跡	おおさかふせんなんししば 大阪府泉南市馬場	27228	NG	34度21分42秒	135度15分54秒	06-1 200610	3	個人住宅	
うじのまつ 氏の松遺跡	おおさかふせんなんしおかだ 大阪府泉南市岡田	27228	UJ	34度22分48秒	135度16分20秒	06-1 200604	3	個人住宅	
おかだ 岡田遺跡	おおさかふせんなんしおかだ 大阪府泉南市岡田	27228	OKD	34度22分49秒	135度16分35秒	05-3 200601	4	個人住宅	
おかだひがし 岡田東遺跡	おおさかふせんなんしきたの 大阪府泉南市北野	27228	OKDE	34度22分52秒	135度16分55秒	05-1 200602	3	個人住宅	
うさいだ 兎田遺跡	おおさかふせんなんしうさいだ 大阪府泉南市兎田	27228	US	34度22分36秒	135度18分27秒	06-1 200605	6	庫裡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
男里遺跡	06-1	集落	弥生	溝か	弥生土器		弥生集落の範囲拡大		
	06-2	-	-	-	-				
	06-3	-	-	-	-				
	06-4	-	-	-	-				
	06-5	-	-	-	-				
	06-6	-	-	-	-				
	06-7	-	古墳	落ち込み	須恵器、土師器				
	05-6	-	-	-	-				
	05-7	集落	古墳	ビット、溝	-				
05-8	集落	弥生	溝か	弥生土器、石器		大溝関連遺構?集落の西限か			
幡代遺跡	06-1	-	-	-	-				
幡代南遺跡	06-1	-	-	-	-				
長山遺跡	06-1	-	-	-	-				
氏の松遺跡	06-1	-	-	-	-				
岡田遺跡	05-3	-	-	-	-				
岡田東遺跡	05-1	-	-	-	-				
兎田遺跡	06-1	-	-	-	-				

泉南市遺跡群発掘調査報告書X X I V

泉南市文化財調査報告書 第 47 集

2007 年 3 月 31 日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会

泉南市樽井 1 丁目 1 番 1 号

Tel. 072-483-0001

印 刷 M・K企画

泉南市男里 6 丁目 12 番 49 号

Tel. 072-485-4437

